

愛媛県越智郡上島町

宮ノ浦遺跡Ⅰ

— 第1次～第4次発掘調査概報 —

2015年3月

愛媛県越智郡上島町教育委員会
愛媛大学法文学部考古学研究室

愛媛県越智郡上島町

宮ノ浦遺跡Ⅰ

— 第1次～第4次発掘調査概報 —

2015年3月

愛媛県越智郡上島町教育委員会
愛媛大学法文学部考古学研究室



北側より宮ノ浦遺跡と燧灘を望む

序

瀬戸内海の島嶼において、考古学研究室が主体となって製塩遺跡を発掘したいという念願がかない、越智郡弓削町（現上島町）の豊島で調査を開始して今年で8年目を迎える。弓削で初めての発掘となった豊島明神遺跡（旧称、豊島東遺跡）では、出土した古墳時代前期・中期の製塩土器が弓削の人々に驚きと感動を与え、「弓削塩文化を伝える会」が立ち上がり、塩の歴史や文化をともに学ぼうという機運が起こった。中世、東寺に塩を貢納したという唯一無二の歴史をもつ島であるという地域住民の自負を実感した。

そして2011年より上島町教育委員会とともに佐島の宮ノ浦（みやんな）遺跡の発掘調査に着手することができた。発掘の過程で、古墳時代前期の製塩址を求めるという当初の目的だけでなく、縄文時代、中世、近世の遺構や遺物が遺されていることもわかり、瀬戸内の海浜ならではの人々の生活痕跡を明らかにしつつある。これは年々、地域の方々の理解が深まり、調査範囲も広がることによって初めて可能となっている。かつての瀬戸内海の沿岸地形は急速に失われつつあるが、この宮ノ浦遺跡は漁村の生活と景観とを明らかにできる数少ない遺跡であると認識しながら、一方で責任を感じつつこの遺跡と対峙している。

第3次調査以降は、製塩遺跡に高い関心をもつ中国山東大学、四川大学、そして韓国の東洋大学の学生達も参画し、考古学研究室の学生達と寝食を共にしながら発掘に汗を流している。日中韓の学生が英語で意思疎通を図りながら、作業を進める姿は私だけでなく、島の人々にも新鮮さを与えている。このような調査を見守っていただき、また地域の行事に学生達を積極的に誘っていただく上島町のみなさまに感謝しながら、今後も宮ノ浦遺跡の発掘調査と島の文化財の活用に対して理解と参画を切に願うものである。

2015年3月

愛媛大学法文学部考古学研究室

村 上 恭 通

序 文

瀬戸内海の島々は、古くから塩業と海運業が盛んでしたが、上島町は中世において京都東寺の荘園として塩を貢納した弓削島を擁しているという点で、輝かしい塩の歴史をもっているというように町民は自負しています。現在、その歴史を文字で記した国宝東寺百合文書がユネスコの記憶遺産にむけて文部科学省から推薦されており、弓削島に根ざしている塩の歴史がもつ重要性をひしひしと感じているところです。

そして、この塩と上島町とのつながりを地下に眠る文化財の調査研究から紐解こうという試みを愛媛大学考古学研究室、東アジア古代鉄文化研究センターとともにすすめているところです。佐島の宮ノ浦遺跡での毎夏の炎天下での発掘作業は、たいへんな重労働であるの見学しながら常々感じていますが、その苦勞の甲斐あって、平成23年以降、毎年新しい古代の塩業に関する発見が増えていきます。これもひとえに愛媛大学村上恭通教授をはじめ同大学考古学研究室の教員、学生の皆さんの努力と地域住民の理解があつてはじめてなせるものであるといえます。

また、一衣帯水という言葉がありますが、海がアジアを身近にし、塩業に関心の深い中国や韓国の学生たちも発掘に参加するために上島町を訪れています。上島町に新たな風が吹き込んでいるのを感じております。

弓削町、生名村、岩城村、魚島村の四町村が合併し上島町となって10年が経ちました。宮ノ浦遺跡や豊島明神遺跡のように正式に発掘調査された例はわずかしきありませんが、各島々にはさまざまな時代の重要な遺跡や遺物があります。今回の報告書は概報ではありますが、今後、上島町が埋蔵文化財の発掘調査を推進し、文化財の保護や活用に向けた大きな一歩であるということを喜びたいと思います。

最後になりましたが、本調査実施にあたり、ご理解とご協力をいただきました関係機関および宮ノ浦地域の地権者、地元住民の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成27年3月

上島町教育委員会

教育長 亀 山 和 磨

例 言

1. 本書は愛媛県越智郡上島町佐島に所在する宮ノ浦遺跡第1次～4次発掘調査の概報である。
2. 遺跡における発掘・記録作業は第2章2に記載した参加者が行った。
3. 遺物の整理作業は次のメンバーが行った。
亀澤一平（現、松野町教育委員会）、下山貴生（現、宮城県教育委員会）、藏本諭（現、大洲市教育委員会）、ダンボンツァグ・グルラグチャー＜以上、愛媛大学大学院修士課程＞、宮下亜季、高森直人、斧香菜子、小野隼弥、白川泰嵩、曾我ちはる、前川瑞貴、渡部みなみ、小田原あかね、織田誠司、大山裕矢、加藤新、中野眞衣、濱本品、持永壮志朗＜以上、愛媛大学学部生＞、八木宏明＜愛媛大学研究生＞、大西遼（現、愛知県陶磁美術館）、荘林純、馬場将史＜以上、滋賀県立大学学部生＞
4. 図のトレースは藏本、グルラグチャー、白川、小田原、織田、加藤、中野、濱本、小野、八木が担当した。
5. 遺物の写真撮影は織田、加藤、大山、持永が行った。
6. 文章は各担当者の氏名を文末に記した。なお第3次、第4次調査でボーリング調査を担当した佐々木尚子氏（京都府立大学）にも寄稿いただいた。
7. 土層の色調は『新版標準土色帖』（農林省農林技術会議事務局監修）に依拠した。
8. 本文中における緯度、経度は国土地理院の地図情報データに基づいている。
9. 本概報には整理途中の資料や知見が含まれており、また来年度以降も発掘調査が継続されることから、その内容に変更が生じる場合がある。その場合、正式報告書における記述を最終的な見解としたい。
10. 本報告書の作成に当たり、次の方々よりご指導、ご協力いただいた。
宮本一夫、福永将大（九州大学）、鈴木康之（広島県立大学）、石岡ひとみ（愛媛県立美術館）、山崎純男（韓国・高麗大学）、柳本照男（韓国・東洋大学校）
11. 本書の編集は村上恭通が行い、八木宏明が作業をたすけた。

宮ノ浦遺跡 I

目 次

巻頭図版

序 文

例 言

頁

第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 調査の経緯・体制・経過	3
1. 調査経緯と目的	3
2. 調査体制	5
3. 調査経過	6
第3章 調査成果	11
1. 調査区の設定	11
2. トレンチの調査成果	12
(1) 1 トレンチ	12
(2) 2・17 トレンチ	13
(3) 6 トレンチ	15
(4) 9 トレンチ	20
(5) 10 トレンチ	21
(6) 11 トレンチ	24
(7) 12 トレンチ	25
(8) 15 トレンチ	27
(9) 18 トレンチ	30
第4章 宮ノ浦遺跡に隣接する湿地におけるボーリング調査（概報）	35
第5章 課 題	37
1. 古式土師器について	37
2. 脚台式製塩土器の口縁部について	38
3. 吉備系土師器について	39
4. 製塩遺跡とクロスナ層の関連について	40
5. 中世の塩田址について	41

図 目 次

- | | |
|-----------------------|---------------------------------|
| 図1 愛媛県上島群島の位置と主要遺跡分布図 | 図16 12トレンチ出土遺物実測図 |
| 図2 佐島島内遺跡分布図 | 図17 15トレンチ北壁土層図 |
| 図3 遺跡の地形とトレンチ配置図 | 図18 15トレンチ・1号土器だまり出土製塩土器実測図 |
| 図4 遺跡のグリッド配置 | 図19 15トレンチ・3号土器だまり出土製塩土器実測図 |
| 図5 1トレンチ土層図 | 図20 18トレンチ平面図・土層図 |
| 図6 2・17トレンチ平面図・土層図 | 図21 18トレンチ出土古式土師器実測図 |
| 図7 6トレンチ平面図・土層図 | 図22 18トレンチ出土製塩土器実測図 |
| 図8 6トレンチ出土古式土師器実測図 | 図23 試料採取地点の位置 |
| 図9 6トレンチ出土製塩土器実測図 | 図24 6トレンチ(上段)・18トレンチ(下段)出土土器の比較 |
| 図10 9トレンチ平面図・土層図 | 図25 製塩土器口縁部の比較 |
| 図11 10トレンチ平面図・土層図 | 図26 宮ノ浦遺跡出土の吉備系土師器 |
| 図12 10トレンチ出土遺物実測図 | |
| 図13 11トレンチ平面図・土層図 | |
| 図14 11トレンチ出土遺物実測図 | |
| 図15 12トレンチの平面図・土層図 | |

写 真 目 次

- | | |
|-------------------------|------------------------|
| 写真1 遺跡遠景(久司山展望台より撮影) | 写真16 9トレンチ北壁(南東から) |
| 写真2 第1次調査前の状況(南から) | 写真17 10トレンチ |
| 写真3 調査風景(第1次調査) | 写真18 10トレンチ出土遺物 |
| 写真4 現地説明会(第1次調査) | 写真19 11トレンチと12トレンチ |
| 写真5 現地説明会(第2次調査) | 写真20 11トレンチ出土遺物 |
| 写真6 調査終了状況(第2次調査) | 写真21 12トレンチ出土遺物 |
| 写真7 調査風景(第3次調査) | 写真22 15トレンチ近景(南から) |
| 写真8 現地説明会(第3次調査) | 写真23 調査風景 |
| 写真9 愛媛大学附属高校生の見学(第4次調査) | 写真24 製塩土器出土状況(南から) |
| 写真10 現地説明会(第4次調査) | 写真25 18トレンチ作業風景(北から) |
| 写真11 1トレンチ(南から) | 写真26 古式土師器出土状況 |
| 写真12 2・17トレンチ | 写真27 18トレンチ出土製塩土器 |
| 写真13 2・17トレンチ出土遺物 | 写真28 6トレンチ出土製塩土器 |
| 写真14 6トレンチ | 写真29 15トレンチ出土製塩土器 |
| 写真15 9トレンチ(東から) | 写真30 後背湿地におけるボーリング調査風景 |

第1章 遺跡の位置と環境

宮ノ浦遺跡は愛媛県越智郡上島町佐島2232番地外に所在し、北緯34度14分41秒、東経131度11分30秒に位置する。佐島は、芸予諸島の北半部を占める上島群島に属し、面積は約2.5km²である。東を弓削島、北を生名島、岩城島、西を赤穂根島に面し、南は燧灘を望む。島の北部に比べ、南部はやや山がちであるが、最高所でも横峰山山頂の標高119.6mであり、上島群島のなかでもとりわけ低平な地形を有する。現在、島の人口は約600人であり、居住域は佐島港のある北西部の本浦や栗手のやや広い平地に形成されている。また東北部の江尻がそれに次ぐ居住域を有しており、それ以外は、沿岸地域の狭い砂丘地域に散在している。

北東部と南部は山や丘陵がそのまま海に没する地形が多く、西側では南の福良湾が発達した大きな入り江を形成している。一方、東側にはその南部において小規模な浅い入り江が連なっており、その一つである宮ノ浦に遺跡は立地している。

佐島は弓削島と同じく、中世において東寺に塩を貢納したことが知られているが、その期間は短く、その大部分は石清水八幡宮が貢納先であったことが石清水八幡宮田中家文書などによってわかる。島内での遺跡、遺物の発見例は少なく、宮ノ浦遺跡が古式土師器、製塩土器の散布地として周

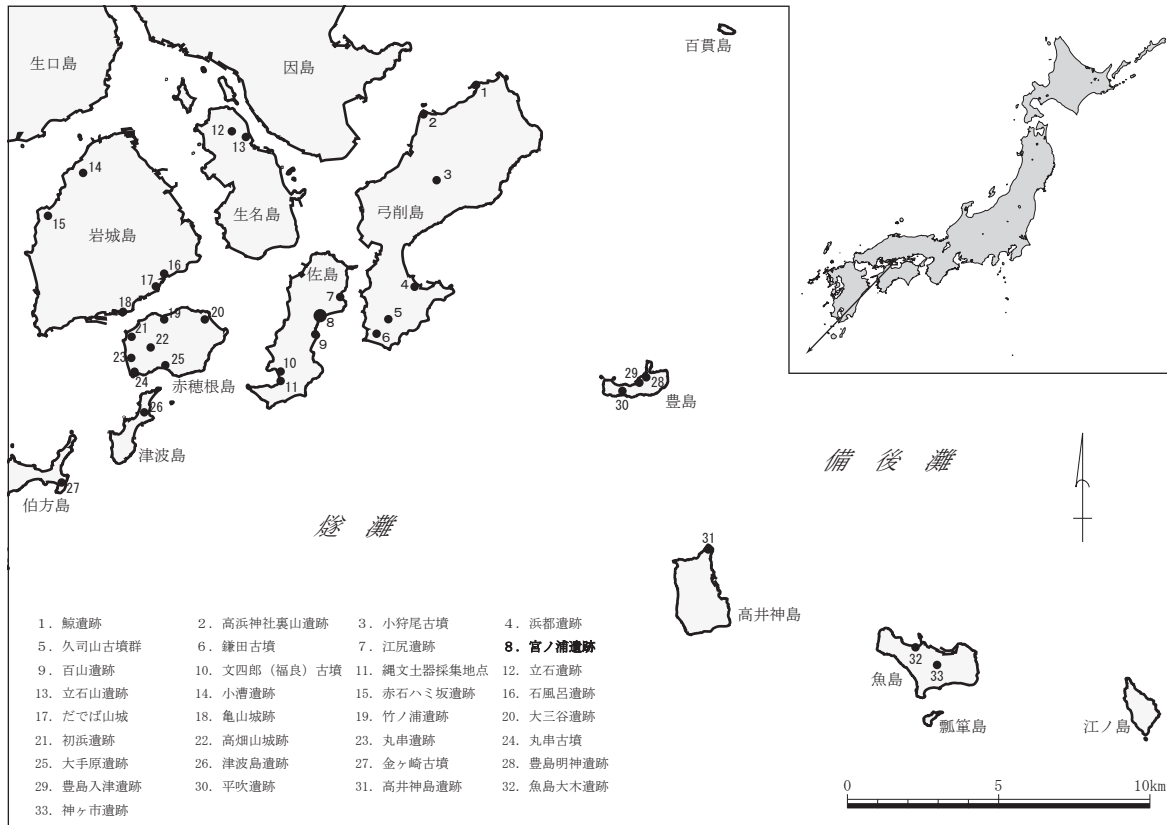
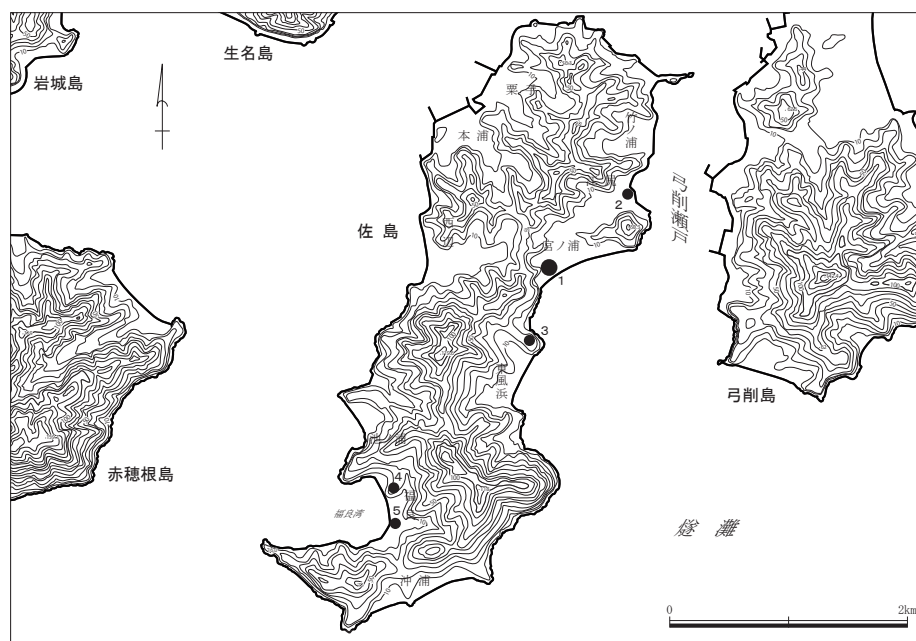


図1 愛媛県上島群島の位置と主要遺跡分布図

知されていた以外は、宮ノ浦百山で旧石器時代のナイフ形石器〔長井2008〕が採集され、また先述の福良湾を望む文四郎古墳（福良古墳）が知られる程度であった。文四郎古墳は箱式石棺墓であり、1970年10月、海岸にいたる生活道を開削する際に発見された。島産の花崗岩で築かれた全長1.62m、幅0.47m、の石棺墓内には3個の割石で作られた石枕があり、付近より頭蓋骨片、そしてやや離れて骨盤片が発見された。また約1mの長さに復元できる鉄刀が出土した。発見当時、この鉄刀が理由もなく頭椎大刀と見なされ、それ以降は古墳時代終末期から古代にかけての埋葬址であろうという推測のみが残された。しかし、近年、愛媛大学考古学研究室が上島町教育委員会と協力して、町内の既発見資料を整理する過程で、頭蓋骨から抽出したコラーゲンを資料として年代測定を行ったところ3世紀から4世紀にかけての年代を得ることができた〔村上編2014〕。同時に九州大学大学院の田中良之先生の鑑定により、この人骨が成年男子のものであることも判明した〔田中2014〕。芸予諸島における古墳時代前期の人骨としては初めての確認例となった。佐島の西に浮かぶ赤穂根島にも、西側に突きだした岬に丸串古墳という箱式石棺墓がある。地山が耕作によって削られ、天井石だけでなく側石までもが地上に露出し、崩壊寸前である。一刻も早い調査と保護が必要であり、文四郎古墳とともに芸予諸島の葬制をものがたる遺跡となろう。

このほか愛媛大学考古学研究室が実施した一連の踏査の際、東部の江尻にある狭小な砂浜で縄文土器、須恵器、青磁片を発見した〔村上編2005〕。この砂浜を南に見おろす標高約20mの丘陵斜面では弥生土器の甕、壺の口縁部片が採集されており、丘陵上に中期末葉の集落が存在する可能性が高い。また西部の福良湾の海岸でも縄文土器を表採しており、後背の砂丘における遺跡の存在が想定できるようになった。

（藏本諭）



1. 宮ノ浦遺跡 2. 江尻遺跡 3. 百山遺跡 4. 文四郎（福良）古墳 5. 縄文土器採集地点

図2 佐島島内遺跡分布図

第2章 調査の経緯・体制・経過

1. 調査経緯と目的

2008年に調査を開始した豊島明神遺跡は3次にわたる発掘調査を実施した。この遺跡は長井数秋氏により発見され、製塩土器と思われる薄手の土器片が表採されていた。2007年、考古学研究室は長井氏とともに踏査を実施し、さらにその後も磯明神社周辺の踏査を積み重ねた結果、脚台式製塩土器片、コップ形製塩土器片を採集し、長井氏の表採地点よりも内陸側において製塩遺跡の存在が想定されたため、2006年にディーン・グッドマン氏の指導のもと地中レーダー探査を実施し、翌年の試掘調査を踏まえ〔石井編2008〕、本調査に着手した。そして古墳時代前期の遺構面を検出し、脚台式製塩土器を伴う集石遺構を発見した。しかし、調査の過程で検出された製塩土器はほとんど煎熬の際の被熱痕が認められず、この遺跡が製塩土器の消費地であり、製塩址ではないと判断するにいたった。ここで、この豊島明神遺跡に製塩土器を供給した塩の生産地を解明するという目的を改めて設定し、新たな製塩遺跡を探索することとなった。

一方、上島群島の遺跡を熟知する岩城島在住の児島公尊氏は1990年頃、佐島宮ノ浦において脚台式製塩土器片を表採し、遺跡の存在を認識していた。その後、2001年に児島氏の案内で古瀬清秀氏、谷若倫郎氏、乗岡実氏、大久保徹也氏らが現地を踏査している〔古瀬編2002〕。



写真1 遺跡遠景（久司山展望台より撮影）

考古学研究室もまた児島氏の教示を受けて2009年に踏査を実施し、遺跡内にある作業小屋の東側の菜園で多数の製塩土器片を表採し、西側の休耕地においてもわずかながら製塩土器片、土師器片を採集した。その後、上島町教育委員会と協議し、上島町の文化財事業として考古学研究室と協力してこの遺跡を発掘調査することが決定した。そして土地所有者と交渉し、調査に対する理解を得ることができ、発掘調査の準備を整えることができた。ただし、作業小屋の東側は当時菜園として使用中であるため、その西側の休耕地を調査対象地とすることとした。なお休耕地西側の雑木林が広がる地域は地元不在の複数の所有者に属することがわかっており、逐次、理解を求めながら調査を進めることとした。

(榎林啓介)

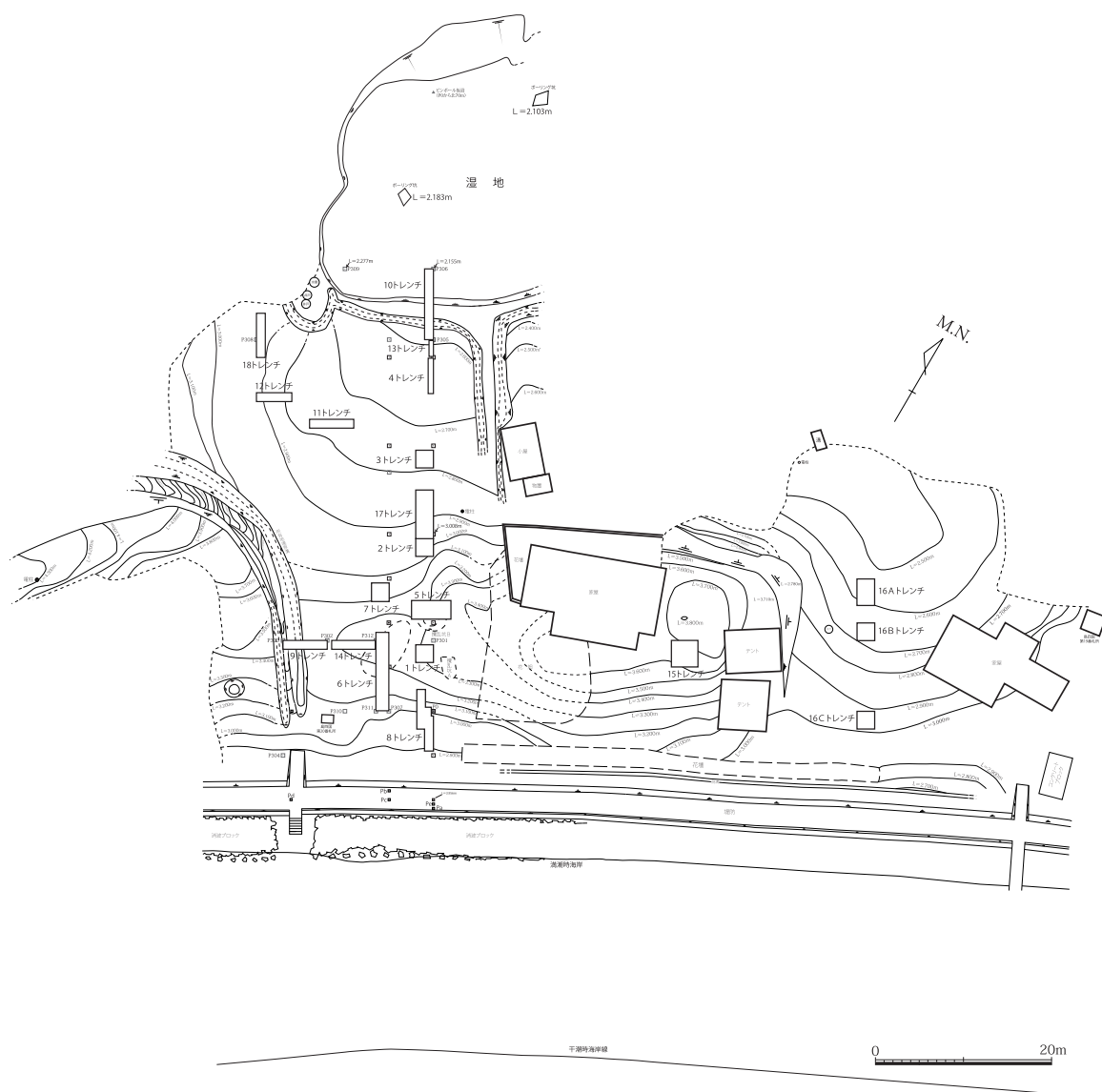


図3 遺跡の地形とトレンチ配置図

2. 調査体制

宮ノ浦遺跡の発掘調査は、愛媛県教育委員会文化財保護課との協議を踏まえ、愛媛大学考古学研究室が上島町教育委員会と協力して実施することとなった。実施体制は次の通りである。

事業主体者：上島町長 上村俊之

調査主体者：小澤宏次（前上島町教育長、第1次調査）、亀山和磨（現上島町教育長、第2次調査～）

調査事務局：小林薫、前神愛、有馬啓介

発掘調査担当：愛媛大学考古学研究室（代表：村上恭通）

発掘調査の参加者は次の通りである。

第1次調査（2011年）：村上恭通（愛媛大学教授）、幸泉満夫（同准教授）、亀澤一平（大学院修士1回生、現松野町教育委員会）、下山貴生（大学院修士1回生・現宮城県教育委員会）、宮下亜希（4回生）、藏本諭（4回生、現大洲市教育委員会）、高森直人（3回生）、斧香菜子（2回生）、小野隼弥（2回生）、新谷孔詩郎（2回生）、ダシボンツァグ・グルラグチャー（研究生、以上愛媛大学）、八木宏明（4回生）、大西遼（3回生、現愛知県陶磁美術館）、村尾真優（3回生、以上滋賀県立大学）、ハンナ・イーストマン

第2次調査（2012年）：村上恭通（愛媛大学教授）、幸泉満夫（同准教授）、亀澤一平（大学院修士2回生）、ダシボンツァグ・グルラグチャー（研究生）、斧香菜子、小野隼弥（学部3回生）、白川泰嵩、曾我ちはる、前川瑞貴（2回生、以上愛媛大学）、大西遼（4回生）、宇野里美、小澤利満（2回生、以上滋賀県立大学）、国安登

第3次調査（2013年）：村上恭通（愛媛大学教授）、榎林啓介（同講師）、藏本諭（大学院修士1回生、現大洲市教育委員会）、ダシボンツァグ・グルラグチャー（大学院修士1回生）、斧香菜子、小野隼弥（4回生）、白川泰嵩、曾我ちはる、前川瑞貴、渡部みなみ（3回生）、大山裕矢、小田原あかね、織田誠司、加藤新、中野真衣、濱本品（2回生、以上愛媛大学）大西遼（大学院修士1回、現愛知県陶磁美術館）、莊林純、馬場将史（3回生、以上滋賀県立大学）、劉芳（3回生）王思佳、王琦喆（2回生、以上中国・四川大学）、付永敢（大学院博士課程）、龍嘯（大学院修士1回生、以上中国・山東大学）、国安登

第4次調査（2014年）：村上恭通（愛媛大学教授）、榎林啓介（同講師）、柳本照男（韓国・東洋大学校講師）、八木宏明、小野隼弥（研究生）、白川泰嵩、前川瑞貴、渡部みなみ（4回生）、大山裕矢、小田原あかね、織田誠司、加藤新、中野真衣、濱本品（3回生）、庭瀬大輝、持永壮志朗（2回生、以上愛媛大学）、小澤利満（4回生）、伊藤航貴（3回生）、伊田匠（2回生、以上滋賀県立大学）、王清剛、姜仕煒（大学院博士課程）、魏澤華（大学院修士1回生、以上中国・山東大学）、賀逸雲、張雯欣、周麗（3回生、以上中国・四川大学）、鄭宗銅（4回生）、金英傑、金東柱（3回生、以上韓国・東洋大学校）、藏本諭（大洲市教育委員会）、大西遼（愛知県陶磁美術館学芸員）、国安登
(村上恭通)

3. 調査経過

(1) 第1次調査

第1次発掘調査は2011年8月10日（水）から8月23日（火）の期間に実施した。調査の目的は遺跡における古墳時代の製塩活動に関する何らかの遺構の存在を確認することであった。発掘の了解を得た作業小屋西側の休耕地において、調査区の南北軸を確定後、一辺5mのグリッドを設定し、南北軸に沿って1トレンチから3トレンチまでの3箇所を発掘した。地表からの攪乱坑（廃棄坑）が2箇所認められたため、併行して層序把握のために掘り下げを試みたが、廃棄物の量が多く、途中で断念した。

この調査では1トレンチと3トレンチで古墳時代前期の製塩土器を含む包含層を確認し、2トレンチで中世塩田に伴う整地層と塩田の基盤層と考えられる不透水性の粘質土層を検出することができた。前者については、製塩に伴う遺構の検出、後者に関しては塩田の広がりや構造、そして詳細な年代を確定するという課題が残った。

8月20日、現地説明会を実施し、愛媛県内各地から74名の参加者を得た。

（八木宏明）

(2) 第2次調査

第2次発掘調査は2012年8月12日（日）から8月26日（日）まで実施された。発掘に先立って地中レーダー探査を実施し、その成果を調査区の設定と発掘に反映させることとした。第1次調査の成果を受けて3つの目的を設定した。第1は中世製塩に関連する遺構の把握、第2は塩田に伴う整地層の南北方向の範囲確認、そして第3は古墳時代前期の製塩遺構あるいは包含層を確認することである。調査範囲は地権者の了解を得て、西部に拡張し、4トレンチから8トレンチまでの5箇所を発掘した。



写真2 第1次調査前の状況（南から）

第1の目的のために設定した6トレンチは、地中レーダー探査で強い反応があった地点を含めるように設定した。調査の結果、レーダーの強い反応が現代の攪乱坑であることがわかり、瓦礫やゴミが大量に出土し、トレンチの南北端では破壊を免れた整地層がわずかながら残っていた。瓦礫に混じって脚台式製塩土器の破片も大量に発見されたが、攪乱坑が深いと想定

されたため、その上面をわずかに掘り下げて発掘を中断した。第2の目的のために設定した4トレンチと8トレンチでは整地層が確認されたが、その端部の状況を確定するにはいたらなかった。そして第3の目的は5トレンチで説明を試み、整地層下で浅い土坑を検出したが、その詳細な時期や性格を明らかにするまでにはいたらなかった。

第2次調査では、古墳時代の製塩遺構に関しては情報を得ることができず、また製塩遺構に伴う遺構も検出することができなかった。また整地面での遺構の検出やその南北方向の広がり の確定に関しても課題を残すこととなった。

8月25日に現地説明会を実施し、県内外から70名の参加者を得た。

なお8月19日には中国・山東大学の方輝、王青両教授の来跡があり、日中間における古代製塩技術の比較に関して活発な議論を行った。

(小野隼弥)

(3) 第3次調査

第3次発掘調査は2013年8月12日(月)から8月25日(日)まで実施した。調査に先立って第1次、第2次調査の成果をふり返し、新たな問題意識を調査チーム全体で共有した。古墳時代前期の製塩について、第1次調査の1トレンチや3トレンチで検出され、遺構埋土と認識していた褐色ないしは黒褐色砂層に対して、温暖期に形成されるクロスナ層と評価できはしないかと疑問をもった。そして、そのクロスナ層に古墳時代前期の脚台式製塩土器が伴うであろうと想定し、甲元真之



写真3 調査風景(第1次調査)



写真4 現地説明会(第1次調査)



写真5 現地説明会(第2次調査)



写真6 調査終了状況(第2次調査)

氏が先導するクロスナ層研究を徹底的に予習した。そこでクロスナ層を面的に捉え、そのクロスナ層と古墳時代前期の製塩関連遺物との共伴を確認することを第1の目的とした。また前年度調査した6トレンチの攪乱坑で大量の脚台式製塩土器片が出土したことから、攪乱坑を一部掘り上げて、プライマリーな包含層を確認することも目的とした。中世塩田に伴う整地層については、前年度の調査で確定できなかった整地面北縁の様相を解明することを目的とした。第3次調査では地権者の理解をさらに得ることができ、調査範囲を西に拡張することができたため、それに伴い調査区西側での整地層の様相や古墳時代前期の包含層の確認も新たな目的とし、9トレンチから13トレンチの5箇所を調査した。さらに後背湿地においてボーリング調査を実施し、花粉分析を通じた古環境に関する調査も計画した。

古墳時代に関しては6トレンチ、9トレンチ、12トレンチにおいてクロスナ層と製塩活動の対応性について明らかにできた。6トレンチの大量の製塩土器片や焼土塊は、近隣における製塩関連遺構の存在を暗に示しているが、第3次調査ではそれについて明確にできなかった。一方、整地層については、11、12トレンチにおいて上層が近世、下層が中世という所見を得ることができた。10トレンチで検出した整地範囲の境界付近部でも、上下2層が検出されており、下層出土遺物が少ないものの、その対応関係が想定できるようになった。ただ第1次調査の2トレンチで発見した不透水性の粘質土を塩田と関連づける立場から、整地層の範囲の中で揚浜式塩田の範囲は当然限定されるに違いない。塩田範囲の限定も大きな課題として残った。

調査期間中、上弓削岳ノ下（だきのした）地区と下弓削高浜地区において試掘調査を行った。岳ノ下地区の個人宅地内では一辺1m弱の範囲を掘り下げ、瓦礫層の下から砂層の上面を検出し、その面より吉備系土師器を含む土器類、獣骨片を得ることができた。また東寺荘園領時代の塩田の存在が確実視される高浜地区の高浜八幡神社ではその境内で2カ所の試掘が許され、うち一つの試掘坑で黒灰色を呈する著しく堅緻な硬化面を検出できた。弓削本島における初めての発掘は極小面積の調査であったが、吉備系土師器の発見、整地面の検出など大きな成果を上げたといえよう。

なお8月24日に現地説明会を実施し、県内外から80人の参加者を迎えた。

（小野隼弥）

（4）第4次調査

第4次発掘調査は2014年8月1日（金）から8月24日（日）の期間に実施した。調査の目的は、前年度の課題を受けて、古墳時代前期の製塩関連遺構の検出と中世塩田の範囲確定を大きな目的とした。また調査範囲を昨年度よりさらに西、東、南へと拡張できたことから、過去調査が及ばなかった作業小屋の東側と後背湿地の西南部に新たな調査区を設定して発掘にあたった。ただ7月後半以降の大雨によって遺跡内の地下水位が上昇し、掘り下げるとすぐに地下から水が湧いて調査の進捗を妨げた。また後背湿地も満水状態で、調査期間中、ポンプの作動しない日はなかった。ただ後背湿地が乾燥のために硬化したり、湿地化したり、また満水状態になるという変化を観察できたことは幸いであった。

まず古墳時代前期の製塩関連遺構の検出のため作業小屋の東側に設定した15トレンチでは、クロ

スナ層上面で脚台式製塩土器片の集中地点を検出し、過去の調査にはない大量の製塩土器の出土を見た。15トレンチのさらに20m東には南北軸に沿った16トレンチを設定し、その範囲の中を北から南にA、B、Cと飛び地的に分け、A区は2m×3m、B、C区は2m×2mの範囲を掘り下げた。15トレンチと同様、整地層は及んでおらず、表土層、旧耕作土層の下は自然砂層であることを確認した。また第3次調査でクロスナ層を検出した9トレンチの東側に、6トレンチと直交するように14トレンチを設けて調査した。その結果、両トレンチをつなぐように面的にクロスナ層を検出することができた。18トレンチは古墳時代あるいは中世の居住区が存在することを予測し、海岸線から最も遠くに離れた調査区北西部に設定した。中近世の遺物を含む1m以上の厚みをもつ整地層を掘り下げると最下層の上面から古式土師器がまとまって出土した。

中世の塩田に関しては第1次で調査した2トレンチをまず掘り上げ、その北側に接して南北に長い17トレンチを設定し、整地層の広がりを確認することを主眼とした。17トレンチは旧耕作土を掘ると直接砂層が現れ、2トレンチの境界付近で東西に延びる遺構の輪郭をとらえた。これによって砂層上面より掘り込まれた土坑内が丁寧に整地されていることを明らかにした。なお17トレンチでは縄文前期、後期の土器片が出土し、周辺に包含層の存在が想定されるようになった。

第4次調査の主な成果は、15トレンチにおいてクロスナ層で脚台式製塩土器片が集中的に堆積する土器だまりを検出できた点である。炉壁、焼土の出土も多く、いよいよ製塩遺構に接近していると考えられ、トレンチ北側に調査区を拡張する必要がある。18トレンチにおける古式土師器もまた



写真7 調査風景（第3次調査）



写真8 現地説明会（第3次調査）



写真9 愛媛大学附属高校生の見学（第4次調査）



写真10 現地説明会（第4次調査）

古墳時代前期の生活域に関する新しい情報を与えた。また中世については2・17トレンチでの大型掘り込み遺構の発見が塩田床土の基盤層に対する理解を促した。この遺構内部の整地層は南の海側に広がると予想されるが、その範囲も課題となった。

なお8月23日に現地説明会を実施し、県内外から75名の参加者を得た。

(八木宏明)

(5) 謝 辞

宮ノ浦遺跡の発掘調査にあたっては地権者である山下卓三氏、岡野泉氏、根岸楠徳氏、島田義治氏、村上佳代子氏、大石稔氏、津國道明氏のご理解とご協力があったはじめて可能となった。心から感謝を表します。

日常生活においては村上知貴氏、村上律子氏、村上友美氏、NPO弓削荘のみなさまには格別なご配慮、ご支援を頂戴した。

また本調査の実現にあたり、伯方塩業株式会社、公益財団法人 福武教育文化振興財団には調査の意義をご理解いただき、ご支援を頂いた。

そして遺跡に足をお運びいただき、ご指導、ご協力頂きました多くのみなさまに記名して衷心より感謝申し上げます(敬称略)。

伊藤宏幸、児島公尊、甲元真之、柴田昌児、島田豊彰、下條信行、白石聡、鈴木康之、田中謙、谷若倫郎、瀬宜田佳男、坪原祥子、日和佐宣正、松村さを里、柳本照男、山内譲、山崎純男、方輝、王青

(村上恭通)

第3章 調査成果

1. 調査区の設定

第1次調査では発掘許可を得た範囲が限定されていたため、その範囲のなかで今後の調査の基準となる軸線、グリッドを設定した（図4）。汀線に直交し、第1次調査区の最高地点を通る線を以後の調査区の南北基準線とし、生活道を避けて原点（P0）を置き、一辺5mのグリッドを設定した。グリッドは東西軸をアルファベット、南北軸をローマ数字で表し、その交点を各グリッドの隅のポイントとする。なお原点は9Kである。

第1次調査では南北基準線に沿って3トレンチ（1～3トレンチ）を調査した。第2次調査では南北基準線上の調査を増やし（4、5、8トレンチ）、さらに西側にも調査区を拡張した（6、7トレンチ）。第3次調査では土地所有者のさらなる理解と協力を得て、伐開をすすめ、調査範囲を

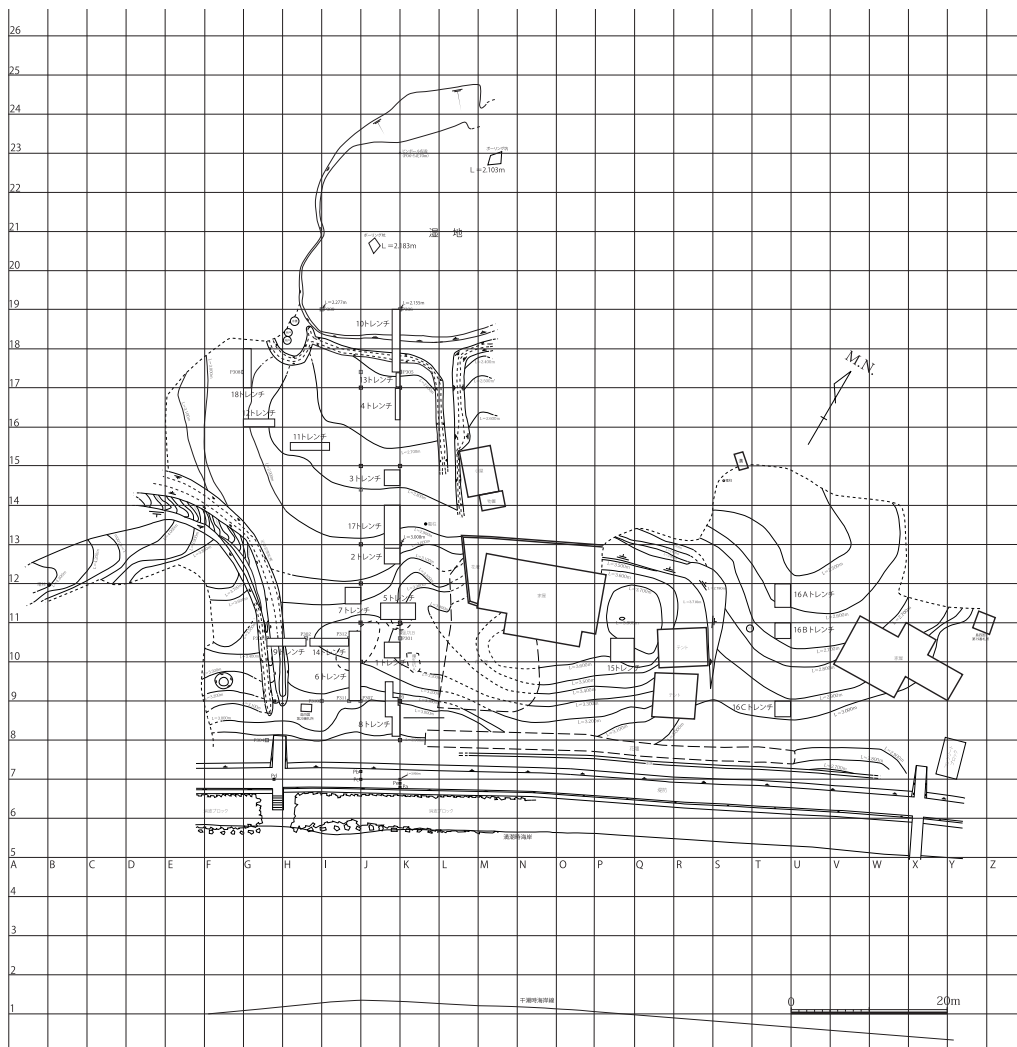


図4 遺跡のグリッド配置

西へ拡張した（9、11、12トレンチ）。また整地層の範囲確定を目的として、南北主軸上で後背湿地にかかるように10、13トレンチを設定し、さらに6トレンチの再調査を実施した。そして第4次調査ではそれまで発掘の及ばなかった建物東側にまで調査範囲を拡張できた（15、16トレンチ）。また2トレンチと6トレンチを再調査し、2トレンチについては接するように17トレンチを設定した。このほか6トレンチと9トレンチの間に14トレンチを、調査範囲の北西隅に18トレンチを設定して調査を進めた。

以下、1トレンチ、2・17トレンチ、6トレンチ、9トレンチ、10トレンチ、11トレンチ、12トレンチ、15トレンチ、18トレンチの調査成果について概述したい。

2. トレンチの調査成果

(1) 1トレンチ

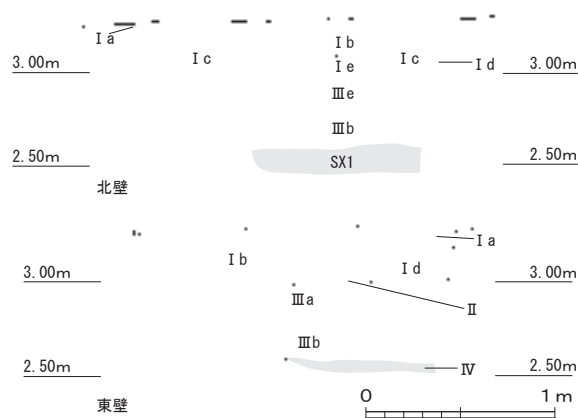
1トレンチは第1次調査において調査区の南北基準線に沿うように設定したトレンチである（写真11、図5）。地表は東から西に向けてわずかに傾斜しており、第1次調査では最も海岸に近く、標高も高い位置にある。

土層は表土を除くと、4層に分けられる。Ⅰ層はコンクリート片やガラス片を含む現代の層である。Ⅱ層は褐灰色を呈する旧耕作土層であり、東西壁で認められる。Ⅲ層は厚みが約40cmに及ぶ非常に堅緻な整地層であり、上下2層に分けられる。上層のⅢa層は花崗岩のバイラン土を主体とする砂質土層で、鈍い黄橙色を呈する。Ⅲb層はⅢa層よりもさらに強く、明褐色を呈する。Ⅳ層は極粗粒砂を主体とし、3mm程度の礫を少量含み、褐色ないしは赤褐色を呈する。ほぼ水平のⅣ層上面では、トレンチ北東部、南東隅に黒みが強まった砂層が広がり、それぞれ不明土坑SX1、SX2と称した。SX1は先行トレンチを入れて確認した結果、20cm以上の深さがあり、大量の製塩土器片や微小な剥片、脚台を含むことがわかった。

遺物はⅢ層より土師器、陶器の小片が出土



写真11 1トレンチ（南から）



Ⅰa：黄灰色で植物の根を多く含む。しまりが弱く、崩れやすい。Ⅰb：灰白色。砂質土層。3～5mmの角礫を多量に含む。しまりが弱い。Ⅰc：浅黄灰色。5mm程度の角礫を多量に含む。しまりが弱く、崩れやすい。Ⅰd：浅黄橙色。砂層。1mm程度の角礫を多量に含む。しまりが弱い。Ⅰe：黄灰色。5mm程度の角礫を多量に含む。Ⅱ：褐灰色。若干軟質の砂質土層。しまりが弱い。Ⅲa：にぶい黄橙色。5～7mm程度の角礫、炭化物を含む。Ⅲb：明黄褐色。5mm程度の角礫、炭化物を含む。a層より硬質。しまりが強い。Ⅳ（先行トレンチ内）：褐色。1～2mmの砂層。3mm程度の円礫を少量含む。炭化物、粘土は含まない。

図5 1トレンチの土層図

上段：北壁 下段：東壁

しており、Ⅲb層では鋳造鋤先片が出土した。Ⅳ層は脚台式製塩土器、土師器が主体を占める。

(斧香菜子)

(2) 2・17トレンチ

2・17トレンチは調査区の南北基準線上のポイント12Kから14Kの間に設けたトレンチであり、海岸と後背湿地のほぼ中間に位置する(図6、写真12)。2トレンチは第1次調査で設定し、重層する整地層(Ⅲa～Ⅲc層)を確認した。整地層の最下層(Ⅲc層)が不透水性の粘質土層であることから塩田床土の基盤層と判断し、その上層の整地層は海水を散布する浜床であると推測した。ただし、第3次調査の11トレンチ、12トレンチにおいて整地層の各層の時期が明確となり、上層が近世、下層が中世の遺物を包含することが判明した。そのため、2トレンチの整地層の時期決定を試みることにした。またⅢc層の北への広がりを確認することも目的とした。そこで2トレンチ北側に幅2m、長さ5.5mの17トレンチを設定し、発掘を進めた。

両トレンチの層序は、表土を除いて8層に分けられる。Ⅰ層は10～20cmの旧耕作土層で、褐灰色を呈する極粗砂を含む土層であり、Ⅱ層は極粗粒砂を含む細粒砂の耕作土層で、にぶい黄褐色を呈する。

Ⅲ層はa～cの3層に分かれ、第1次調査では砂層の上に造成された整地層であると認識されていた。第4次調査では2トレンチの北に接して設定した17トレンチの南端で東西方向の掘り方が検出された。この遺構は17トレンチ南端から2トレンチに向けて掘り込まれ、17トレンチのみにみられるⅣ層から砂層のⅤ層にまで達し、平坦な底部を形成している。その深さは40cmを測る。

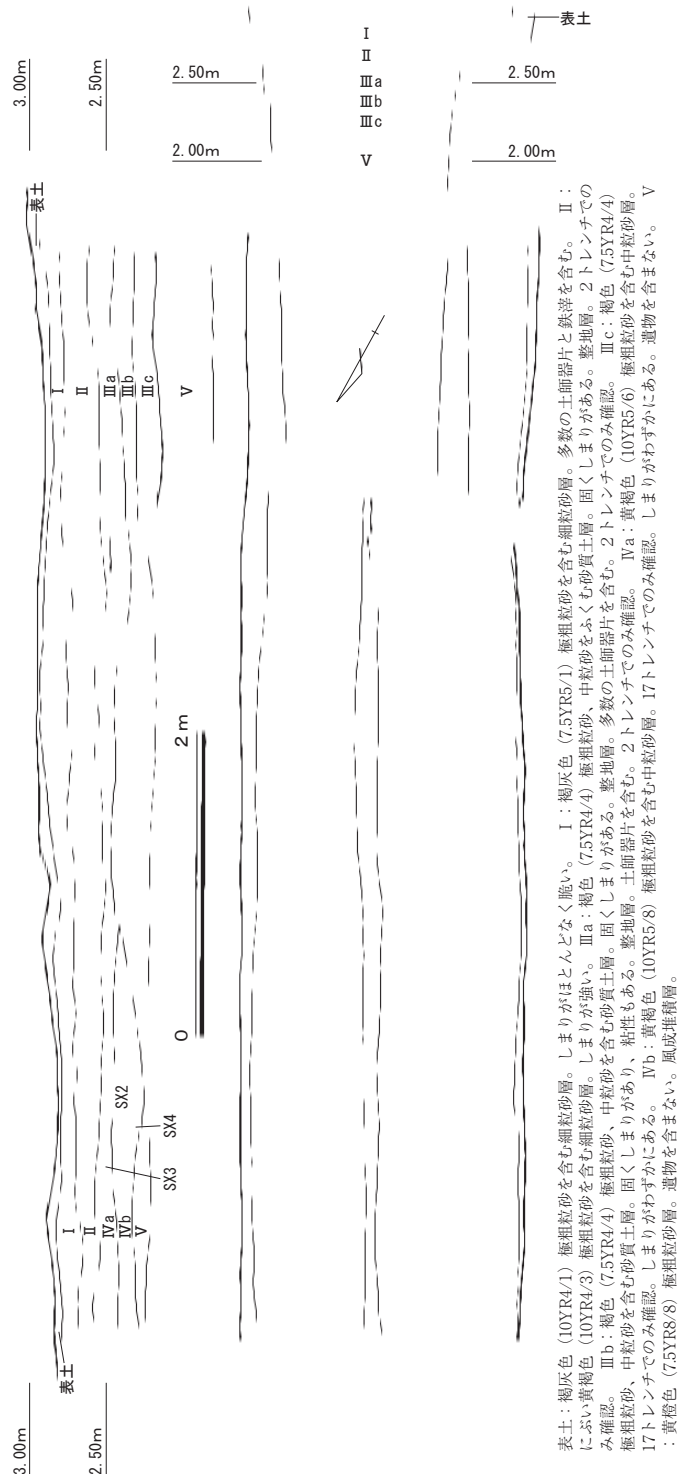


図6 2・17トレンチ平面図・土層図



写真12 2・17トレンチ

- 1 17トレンチ（手前）と2トレンチ（北より）
- 2 遺構検出状況
- 3 2の部分拡大
- 4 トレンチ東壁における遺構の断面



写真13 2・17トレンチ出土遺物
左：表 右：裏

つまりⅢ層はその底部からc→b→aと順に造成された整地層であることが判明した。Ⅲa層、Ⅲb層は褐色を呈する花崗岩のバイラン土を主体とした砂質土層であり、その上面はいずれも非常に堅緻である。Ⅲc層も堅緻であるが、粘性があり、水分を透過させず保水性がある。

Ⅲ層を伴う掘り込みによって切られたⅣ層は17トレンチのみで確認でき、a、b2層に分かれる。Ⅳa層は厚さ4～18cmの黄褐色土層で、トレンチの北部で土坑SX3とSX4が掘りこまれている。Ⅳb層はトレンチの北西部にのみ確認できる厚さ10～13cmの明黄褐色を呈する整地層であり、SX4が掘りこまれている。Ⅴ層は黄橙色を呈する極粗粒砂の自然砂層である。

遺物は第1次調査で2トレンチⅢ層から太宰府分類Ⅳ類の白磁玉縁碗や吉備系土師器片が出土している〔幸泉2012〕。17トレンチではSX3の底部で土師器片にまじって縄文時代前期の轟A式土器や後期の磨消縄文土器片、緑色結晶片岩製の礫石錘などが出土している（写真13）。

（小田原あかね・濱本品）

（3）6トレンチ

6トレンチは調査区の南側に位置し、ポイント9Jを基準に設定した南北9m、東西1mのトレンチである（図7、写真14）。2次調査で実施した地中レーダー探査の成果に基づいて発掘を始めたが、探査で捉えた土坑が現代の攪乱坑であることが判明したため、北端、南端の整地層を検出し、攪乱坑内を一部掘り下げただけで掘り下げを中止した。しかし攪乱坑内で大量の製塩土器片が出土したことから、プライマリーな包含層や製塩関連遺構が周囲に存在することを想定し、第3、4次調査で攪乱坑内部を掘り上げ、一部整地層を掘り下げた。

土層は表土層下、大きくⅠからⅤ層に分けられるが、Ⅳ層以下は攪乱坑の南北で大きく土層の様相が異なるため、その対応関係を必ずしも十分に説明することはできない。

トレンチ北壁寄りでは攪乱を免れ、旧耕作土のⅡa層の下からⅢ、Ⅳ、Ⅴa層が確認された。Ⅲ層は整地層であり、a、bの2層に分かれる。花崗岩バイラン土を基調とし、中粒砂を多量に含む層で、黄褐色を呈する。堅緻に叩きしめられた層であり、Ⅲb層の方が堅い。Ⅳ層は砂層であり、厚さは70～80cmに及び、南から北へ向けて緩やかに傾斜している。色調や砂粒の大きさ、出土遺物の状況から①から⑤の6層に分層される。色調は①層がにぶい黄色で、①層以下褐色が強くなり、②～⑤層までは黒褐色あるいは暗褐色である。いずれも粗砂粒が主体で、中砂粒、極粗砂粒が混成している。①から⑤までは有機物の腐食によりできたクロスナ層と判断される。Ⅴa層はにぶい黄橙色を呈し、極粗粒砂を主体に粗粒砂を含み、しまりは全くない。自然の風成堆積層である。

トレンチの南半は大部分が攪乱から免れており、Ⅰ～Ⅴの層序を確認できる。Ⅲ層、Ⅴa層は存在し、北半と対応するが、Ⅳ層のクロスナ層に対応する層は認められない。

Ⅴ層以下は基本的に黄橙色～黄褐色の砂層であり、風成堆積層と考えられる。

トレンチ南半の遺物は非常に乏しく、Ⅲ層から土師器や中世須恵器の細片、Ⅳ層、Ⅴ層から製塩土器片などがわずかに出土した。

6トレンチでは攪乱を免れた北端部のⅣ層から数点の古式土師器と大量の脚台式製塩土器が出土している。

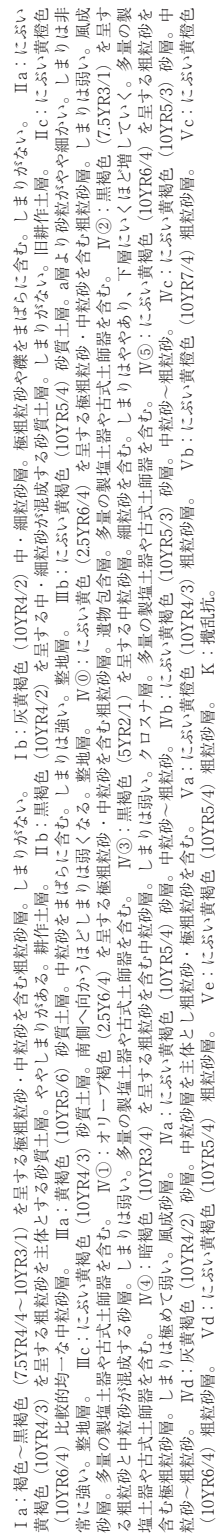


図7 6トレンチ平面図・土層図



写真14 6トレンチ

- 1 整地層と攪乱抗（南から） 2 クロスナ層検出状況 3 クロスナ層中の製塩土器 4 クロスナ層完掘状況
5 土層（トレンチ北部・西壁） 6 14トレンチとの位置関係 7 発掘完了状況（北から）

古式土師器（図8） 甕（1～5）、高坏（6）、鉢（7）がある。甕は、口縁部が頸部から屈曲部にかけて緩やかに直線的に外傾するタイプ（1）と頸部から強く屈曲するタイプ（2～5）がある。後者は口縁端部がわずかに突出したり（3、4）、肥厚している（2）。4は外面をタタキのあとと丁寧にハケメで消しており、内面はヘラケズリのあと、わずかにナデ消している。一方、3や5は外面にタタキの痕跡をそのまま残している。2、4の胎土は緻密で、わずかに金雲母を含むのに対し、3、5は胎土に礫を含む量も多く、精良さを欠き、金雲母は含まない。高坏は坏部の破片であり、丁寧にミガキが施されており、胎土も緻密である。鉢は口縁部がわずかに屈曲し、丸底をもつ。外面はハケメ調整のあと、とくに上半部が丁寧にナデ消されており、内面はハケメの痕跡をよく残している。

製塩土器（図9） IV②層～④層で57点の製塩土器の脚台が出土した。

7～10はIV②層、11～18はIV③層上層、19～22はIV③層下層、23～34はIV④層からそれぞれ出土した。IV④層の脚台は、端部径が最大で6.1cm、最小で4.4cmを測る。平均径も5.3cmと大きく、がっしりとして厚みのあるものが多い。IV③層下層出土脚台式製塩土器は、端部径が最大5.8cm、最小3.6cmを測り、平均径は4.9cmである。この層から上層では6cm以上のものが消滅し、3cm台の脚台が現れる。IV③層上層で出土した製塩土器は端部径が最大で5.2cm、最小で3.4cmであるが、5cmを超えるものの割合は低く、平均径は4.3cmにとどまる。IV②層の脚台式製塩土器は、端部径が最大で4.8cm、最小で3.2cmを測る。底径の平均も4.2cmと著しい小型化がうかがえる。

製作技法に注目すると、層を問わず円盤充填法、もしくは一体成形で作られているものが多い。

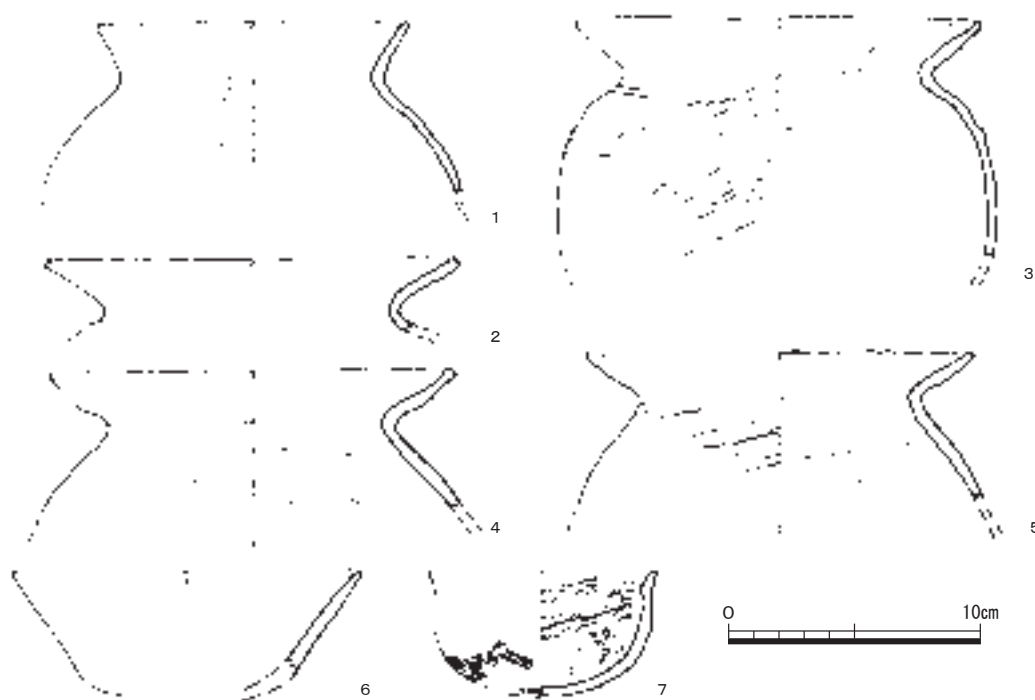


図8 6トレンチ出土の古式土師器実測図

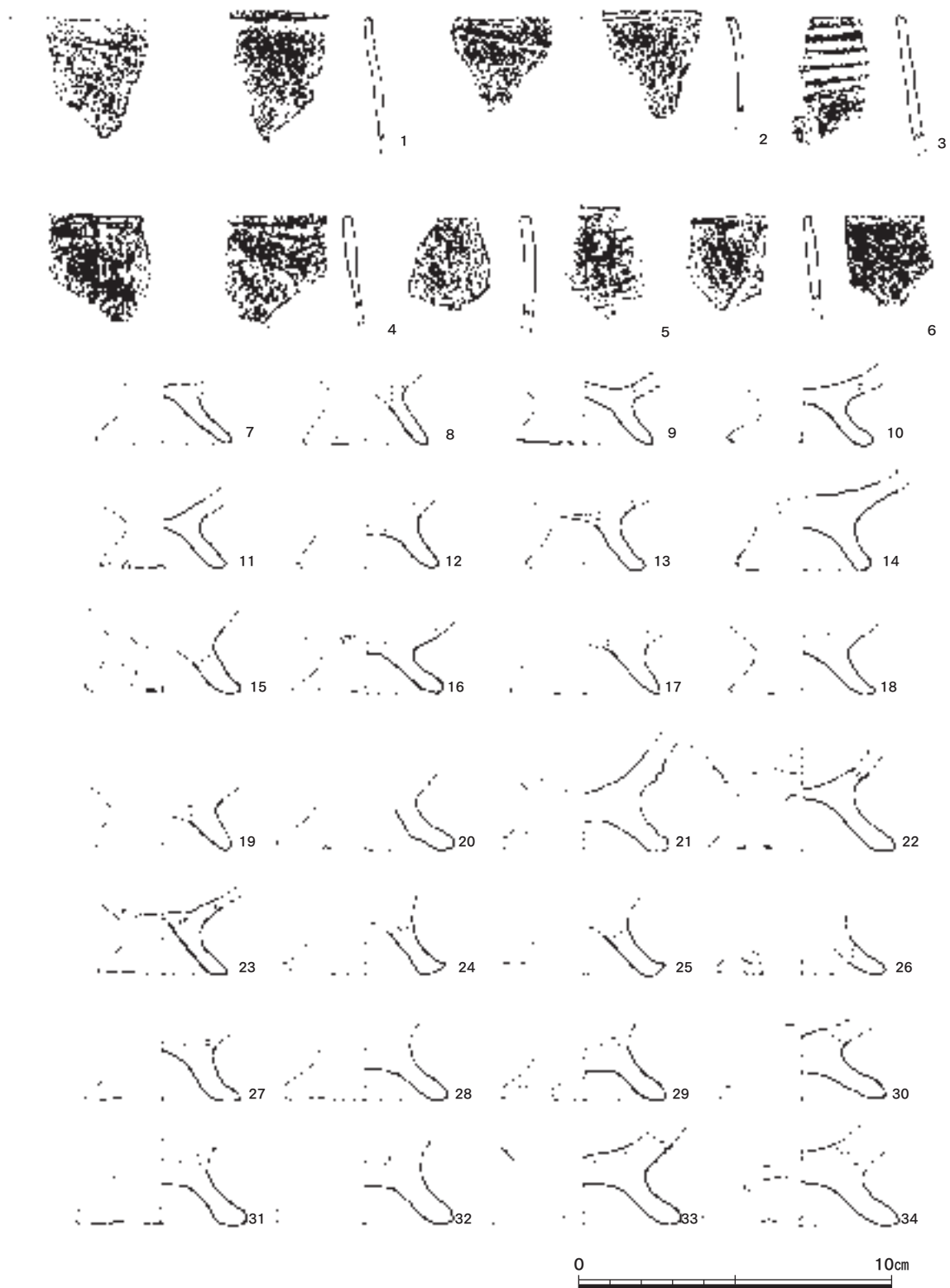


図9 6トレンチ出土製塩土器実測図

中には脚台に粘土を貼付けたものや、端部を折り返したものも確認できるが点数は少ない。また、強い二次被熱を受け変色した脚台も少数ながらみられる。

総じて製塩土器の脚台部は、下層から上層になるにつれて小型化していることがわかる。Ⅳ④層の段階では大きな脚台のものだけが使用され、次のⅣ③層下層になると4cm以下の小型のものが現れ、次第に後者の割合がⅣ③層上層、Ⅳ②層と上層になるにつれ増加することが理解できる。

(白川泰嵩)

(4) 9 トレンチ

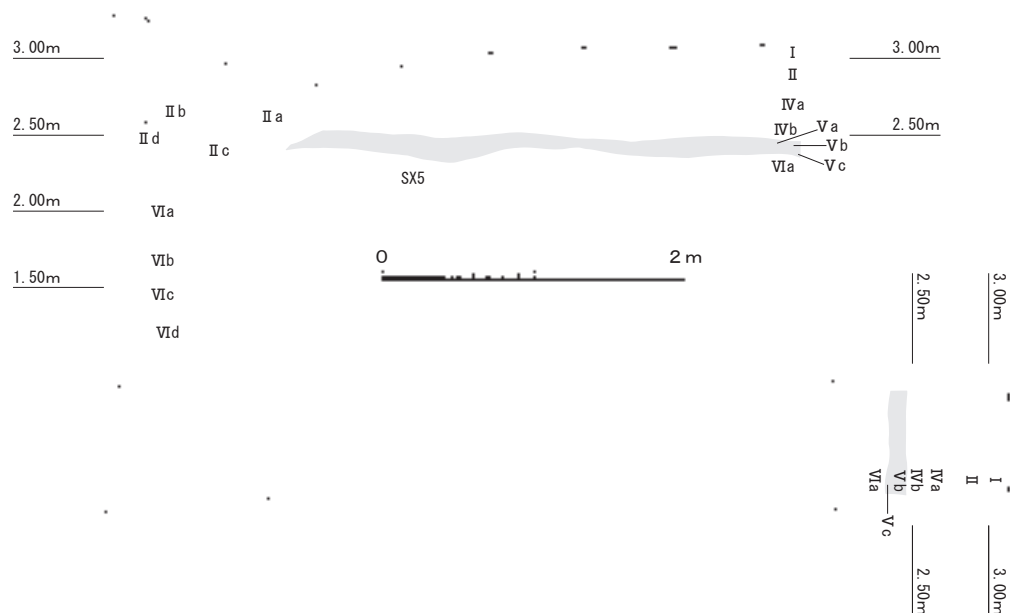
9 トレンチは第2次調査まで調査の及ばなかった遺跡西部における遺構や包含層の状況を確認す



写真15 9 トレンチ (東から)



写真16 9 トレンチ北壁 (南東から)



Ⅰ：にぶい黄褐色（10YR6/3）細粒砂層。細礫まじり。Ⅱa：褐色（10YR4/4）細粒砂層。しまりあり。木炭・ガラス片を含む。Ⅱb：にぶい黄褐色（10YR5/4）細粒砂層。細礫まじり。しまりあり。現代の遺物含む。Ⅱc：褐色（10YR4/6）中粒砂層。細礫まじり。しまりあり。Ⅱd：黒褐色（10YR2/3）粗粒砂層。極粗粒砂まじり。しまりなし。Ⅲ：褐色（10YR4/4）細礫まじり細粒砂。旧耕作土層。Ⅳa：黄褐色（10YR5/6）砂質土層。細礫、極細粒砂を含む。非常に堅緻。しまり強い。整地層。Ⅳb：にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土層。aよりも細礫を含む。堅緻で、しまりがあるがボロボロくずれやすい。約1～3cmの粘土塊を含む。また、製塩土器片を含む。整地層。Ⅴa：褐色（10YR4/6）中粒砂層。極粗粒砂まじり。しまりが無い。Ⅴb：暗褐色（10YR3/4）中粒砂層。極粗粒砂まじり。しまりなし。古墳時代製塩土器細片、縄文土器が出土。クロスナ層。Ⅴc：褐色（10YR4/6）中粒砂層。極粗粒砂まじり。しまりなし。遺物出土量はⅣbよりも少ない。クロスナ層。Ⅵa：にぶい黄褐色（10YR6/4）粗粒砂層。極粗粒砂まじり。しまりなし。遺物含まず。Ⅵb：にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂層。しまりなし。遺物含まず。Ⅵc：暗褐色（10YR3/3）粗粒砂層。しまりなし。遺物含まず。Ⅵd：褐色（10YR4/6）極粗粒砂層。粗粒砂まじり。しまりなし。遺物含まず。湧水（海水）あり。

図10 9 トレンチ平面図・土層図

る目的で設定した（図10、写真15・16）。5 m × 1 mの東西に長いトレンチである。

トレンチ内の地表面は東から西へわずかに傾斜し、幅約 1 mの浅い溝から40cm程度の比高差を介して西側の平坦面にいたる。地表の形状通りに堆積したⅠ層を除去すると、溝の下には窪地に西の平坦地から流れ込んだと考えられるⅡ a ～Ⅱ d 層の堆積が確認された。Ⅲ層は細礫まじりの細粒砂層であるが、ガラス片等を含んでおり、Ⅱ a 層はそれよりも新しい堆積と判断できる。

Ⅳ層は a、b 2 層に分かれ、いずれも堅緻でしまりがある層である。すでに説明した各トレンチのⅢ層、整地層に対応するものと判断できる。このⅣ層は西に緩やかに傾斜しており、厚みも薄くなり、堅緻さも失いつつあり、整地層の境界に近い状況とみられる。Ⅳ b 層は脚台式製塩土器片、1 ～ 3 cm 程度の焼土塊を含んでいる。

Ⅴ層は a ～ c の 3 層に分けることができ、それぞれ褐色、暗褐色、褐色を呈し、極粗粒砂まじりの中粒砂層である。Ⅴ b 層はトレンチ内のほぼ全面に広がり、その色調の特徴からクロスナ層と考えられる。脚台式製塩土器片多数、そして縄文土器片が 1 点出土している。

Ⅵ層は 4 層からなり、少なくとも約 1.5 m の厚さをもつ。黄橙色～暗褐色の色調を呈し、粗粒砂あるいは中粒砂を主体とする砂層であり、遺物は含まれない。Ⅳ d 層中、標高 0.946 m の地点で湧水が確認された。湧水は約 3 % の塩分を含んでおり海水である。

遺構としては、トレンチ中央部のやや西寄りで幅約 0.5 m、深さ約 0.4 m の土坑（S X 5）が検出された。

（藏本論）

（5）10 トレンチ

10 トレンチは塩田に伴う整地層の北縁を確認し、後背湿地の状況を把握する目的で、グリッドの南北基準軸に沿ってポイント 17 K ～ 18 K にかけて設定した（図 11、写真 17）。砂丘の微高地と後背湿地をつなぐ幅 1 m、長さ 8 m のトレンチである。トレンチの南半部では人工的な遺構に伴う堆積、北半部では湿地に伴う水成堆積がそれぞれ主であることから、説明上、混乱を避けるために北半部についてはアルファベットを用いて層序説明を行う。

トレンチ南半部は整地層が全面に広がることを確認した後、西半分を掘り下げた。土層は大きく 4 層に分かれ、Ⅱ層以下はいずれの層も湿地との境界で複雑な堆積を示している。Ⅱ層は粗粒砂を含む砂質土を主体とし、Ⅱ a 層はⅡ e、f 層からなる土手状の堆積の南側に広がっている。湿地との境界に土手を設け、その内側に耕作地が造成されたものと解釈できる。土手の北側は鋭く削られ、その面にⅡ c、d 層が堆積している。

Ⅲ層は花崗岩のバイラン土を主体とし、非常に堅緻に突き固められた整地層である。Ⅲ a 層は南から北にかけて緩やかに傾斜し、その北端はⅢ b 層からなる土手状堆積の斜面にのっている。

Ⅳ層も堅緻に突き固められた整地層であるが、Ⅲ層よりはしまりが無い。この層もⅣ a 層が南から北にかけて緩やかに傾斜しながら、その西端でⅣ b ～ d 層により形成された土手状の堆積に接している。Ⅳ b ～ d 層は後背湿地の青灰色シルトや褐色のマンガンを含む粘土が混じっており、Ⅲ層の様相とは異なっている。

遺物はトレンチ北半部、南半部ともに出土量は少ない。南半部ではⅢ層以下、土師器ないしは土師質土器の出土がみられるが、微小片のため詳細が判然としない。

(斧香菜子・ダシボンツァグ・
グルラグチャー)

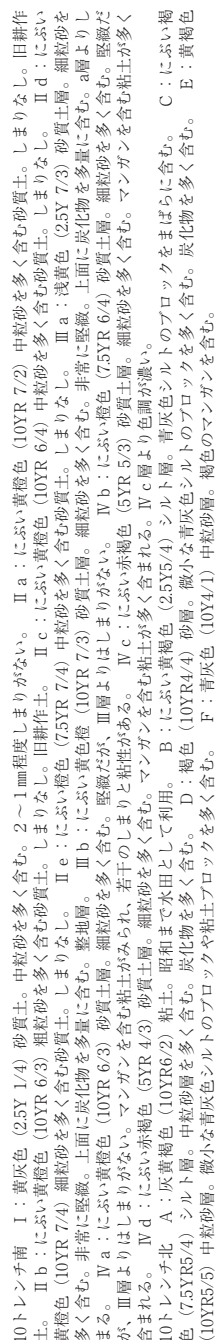


図11 10トレンチ平面図・土層図



写真17 10トレンチ

1 調査終了（北から） 2 北半分土層堆積状況（北東から） 3 南半分（北東から） 4 南北部整地層断面（東から）

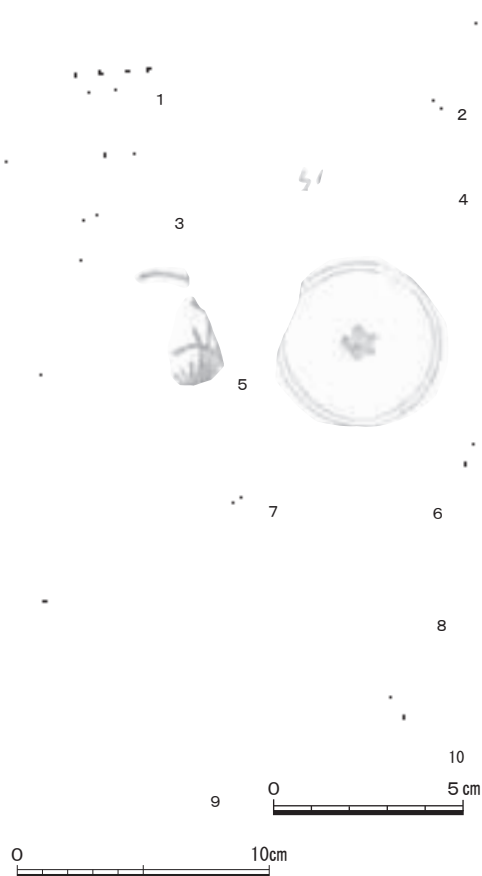


図12 10トレンチ出土遺物実測図

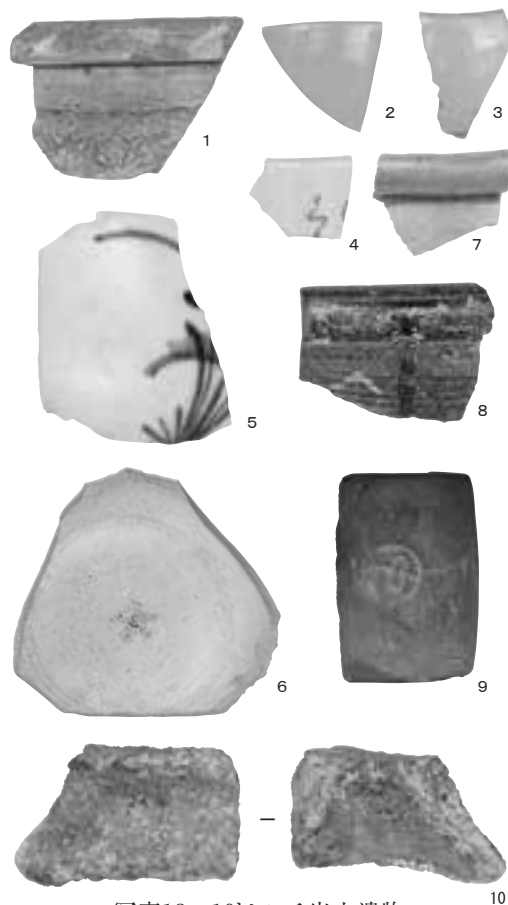


写真18 10トレンチ出土遺物

(6) 11トレンチ

11トレンチは遺跡北西部の包含層や整地層の状況を確認するために設定した（写真19、図13）。ポイント17 J から南へ8 m、西へ4 mの地点を起点とする東西5 m、南北1 mのトレンチである。トレンチ全面で整地層Ⅲ層の広がりを確認した後、北半のみを掘り下げた。

I 層は表土層、II 層は旧耕作土層である。Ⅲ a 層は花崗岩バイラン土を主体とする極粗粒砂を含む砂質土層であり、堅緻に突き固められた整地層である。上面はほぼ水平で、厚さは約25cmである。遺物の量はわずかであるが、中世から近世ごろの土師器や備前焼が出土しており、近世の整地層と考えられる。土坑（S X 5）が1基検出されているが、壁面での検出のみで平面的な検出は行えなかった。Ⅲ b 層も花崗岩のバイラン土を主体とし、浅黄橙を呈する。Ⅲ a 層よりしまりが強く固い。南へやや傾斜しているが、Ⅲ a 層の造成時に削られている可能性がある。厚さは平均で約15 cmを測る。遺物は、吉備系土師器以外は微小な土師質土器片が多く、器種や産地が判明する資料は少ない。近世の陶磁器は含まない。IV 層は0.5～1 mmの粗粒砂で構成される砂層でにぶい黄褐色を呈する。しまりがなく、自然砂層であると考えられる。土師器の微小な破片が出土しており、中世以前の層と考えられる。

トレンチ中央部からやや西に寄った北壁付近で土坑（S X 6）1基が検出された。Ⅲ a 層に掘り



写真19 11トレンチと12トレンチ

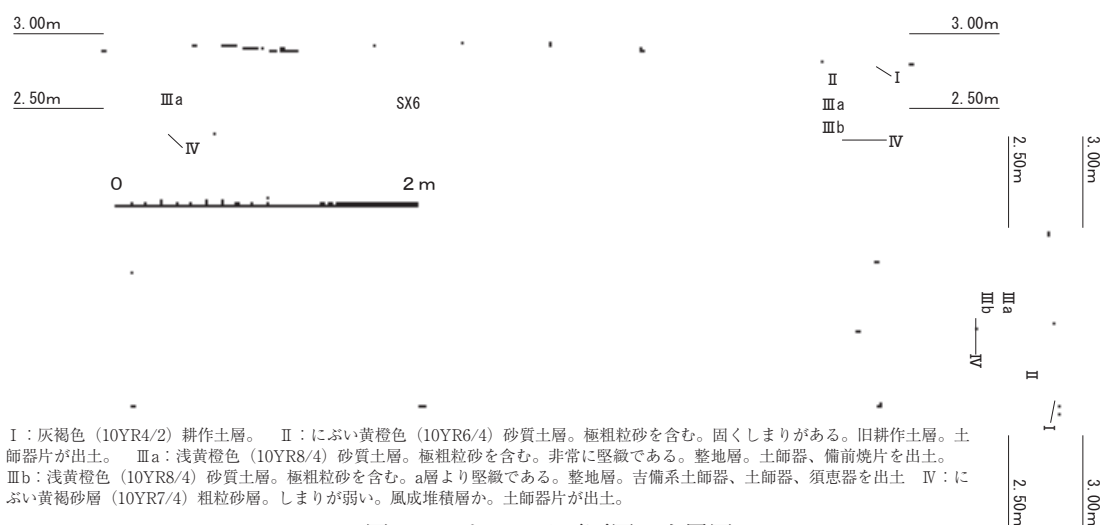


図13 11トレンチ平面図・土層図

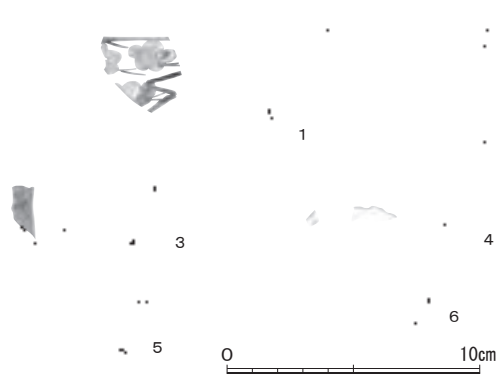


図14 11トレンチ出土遺物実測図

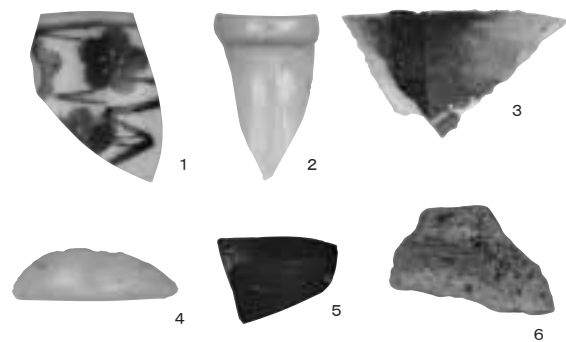


写真20 11トレンチ出土遺物

込まれ、底はⅢb層上層に達している。径約65cm、深さ約30cmである。遺物の出土はない。

遺物は出土量が少なく、小片が多い（図14・写真20）。1は瀬戸焼の茶碗である。復元口縁部径15.0cmを測る。染付けで草花文が施されている。外面と内面は灰白色を呈している。胎土は精良で、焼成は良好である。Ⅱ層より出土した。2は磁器の徳利である。近世のものと考えられる。口縁部の1/3以下程度が残存していて、復元口縁部径4.0cmを測る。内部にのみ加工痕と思われる緩やかな段が確認できる。外面と内面は明オリーブ灰（2.5GY7/1）色を呈している。胎土は精良で、焼成は良好である。Ⅱ層より出土した。3は京・信楽系磁器の胴部片である。内外面で釉薬が異なり、外面は浅黄色で、内面はオリーブ褐色を呈する。内部の釉薬には、さらに上からオリーブ黒色の釉薬が流しかけられている。時期は18世紀頃とみられる。Ⅱ層より出土した。4は磁器の碗の高台片であり、復元底径は8.0cmを測る。赤絵が痕跡的に確認できる。18世紀頃のものと考えられる。6は吉備系土師器碗の高台片である。高台は器体を安定させる機能を保っており、粘土紐を貼り付けたのち、ヨコナデにより形を整えている。草戸Ⅰ期後半に相当し、時期は13世紀後半から14世紀初め頃に比定できる。胎土は精良で、金雲母をまばらに含む。Ⅲb層より出土した。

（小野隼弥・濱本品）

（7）12トレンチ

12トレンチは調査範囲の北西区にあり、ポイント16Fを基準に設定した東西4m、南北1mのトレンチである（図15）。第2次調査まで発掘が及ばなかった北西地域における整地層、包含層の状況を確認することを目的とした。整地層であるⅢ層がトレンチ全面に広がることを確認した後、南半部のみを掘り下げた。

土層は7層に分かれる。Ⅰ層は表土層である。Ⅱ層はにぶい黄橙色を呈する極細粒砂を含む砂質土層であり、旧耕作土である。Ⅲ層は非常に堅緻な整地層であり、しまりや色の違いからa、bに分層できる。Ⅲa層は花崗岩のバイラン土を主体とし、浅黄色を呈する。Ⅲb層も同じ土質と色調であり、Ⅲa層に比べて一層堅緻である。Ⅳ層は黄褐色の粗砂粒砂層であり、しまりがない。Ⅴ層は褐色を呈する中粒砂を主体とする砂層である。脚台式製塩土器片や土師器の小片が出土する。Ⅵ層は明黄褐色のしまりのない中粒砂層であり、遺物の出土はない。

遺物はⅥ層を除く全ての層から出土しているが小片が多い（図16、写真21）。Ⅳ層では土師器の小片が多数出土しており、その時期の検討が必要である。1は備前系の香炉であり、二重高台をもつ。外面は鯨肌状を呈し、花文のスタンプが2か所確認される。一方、内面には成形時の布目痕が全体にみられる。Ⅱ層から出土した。2は和泉型瓦器碗の高台片である。高台は貼り付け技法により成形されており、内外面ともにヨコナデ調整が認められる。時期は12世紀後半～13世紀前半頃に比定される。3は表土より出土した有溝土錘である。備前系の焼き物で、表面には部分的に自然釉が認められ、全体的に明赤褐色を呈する。重量は約10gを測る。4、5はⅤ層より出土した製塩土器の脚台部片である。4は外面に成形時の指オサエの痕跡を残し、色調は明褐色を呈す。脚台底部の復原外径は3cmと小さい。5は4に比べて脚台底部がラッパ状にやや広がる。外面は明赤褐色、内面は浅赤褐色を呈する。これらのほかⅡ層、Ⅲa層で茶道具として使用されたと考えられる近世の磁器碗片や備前系で輪花タイプの煎餅皿も出土している。

（中野真衣）

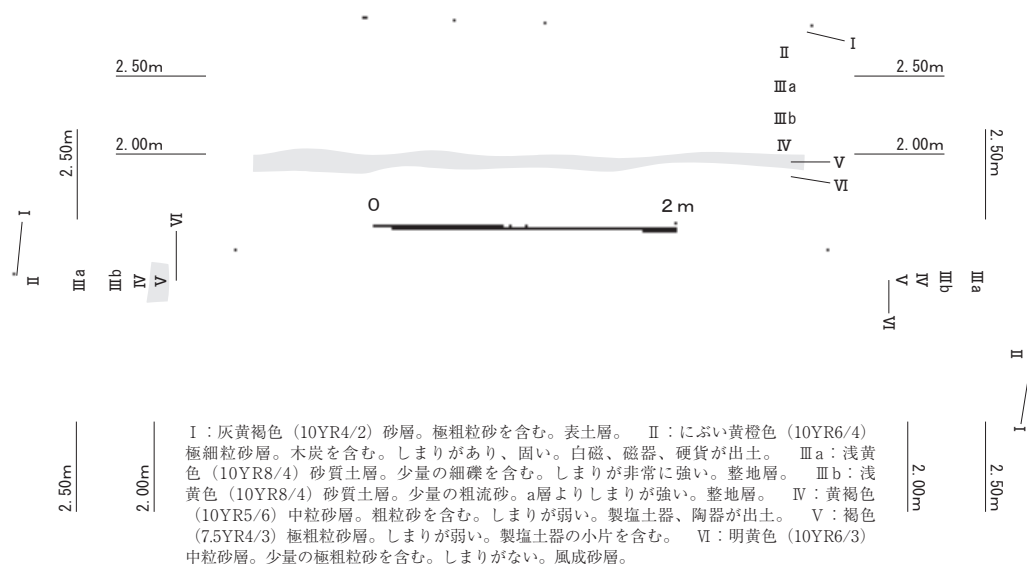


図15 12トレンチの平面図・土層図

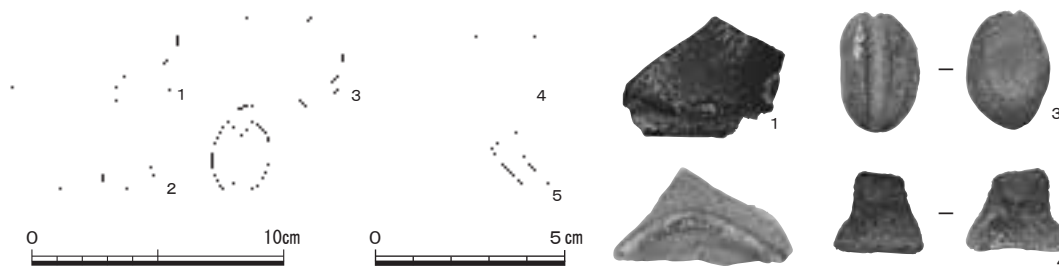


図16 12トレンチ出土遺物実測図

写真21 12トレンチ出土遺物

(8) 15トレンチ

15トレンチは第3次調査まで着手できなかった遺跡東部に位置し、ポイント10Qを基準に東西3m、南北3mの正方形のトレンチである(写真22～24)。遺跡東部における整地層や包含層の広がりを確認することを目的とした。調査範囲のなかでは、標高が最も高く、また表採される製塩土器片の数も多く、第1次調査を開始する以前から製塩関連遺構の検出が期待された地点である。

このトレンチでは12層を確認した(図17)。Ⅰ層はにぶい黄褐色を呈する中粒砂中心の砂質土層、Ⅱ層はにぶい黄褐色を呈する粗粒砂をわずかに含む中粒砂層である。Ⅲ層は黒褐色の中粒砂を含む砂質土層である。ここまでの層は現代の瓦やビニールなどを含んでいる。

Ⅳ層は東壁付近でa、b層の2層に分けられる。Ⅳa層は暗褐色を呈する中粒砂に細粒砂を含む遺物包含層である。北壁中央が約25cmと最も厚く、大きな傾斜はなく西側に行くにつれて薄くなる。東壁にのみみられるⅣb層は暗灰黄色を呈する粗粒砂中心の砂質土層で、Ⅳa層よりしまりは強く、炭や少量の石灰を含んでおり、厚みは5～9cmを測る。

Ⅴ層は北壁付近のみでみられ、a、bの2層に分層できる。Ⅴa層は中粒砂を主体とする褐色砂層であり、厚みは5～8cmである。Ⅴb層は細粒砂を主とする黄褐色砂層であり、西に行くほど厚みを減ずる。いずれの層も脚台式製塩土器片を含んでいる。

Ⅵ層はトレンチのほぼ全面に認められる層であり、2層に分層される。Ⅵa層は、暗褐色を呈する細粒砂からなるクロスナ層であり、しまりは強い。その上面の標高は14トレンチで発見されているクロスナ層と比べると70cm標高が高い。製塩土器片、炉壁状の焼土塊、炭酸カルシウムの塊が多数出土している。Ⅵb層は灰褐色の砂質土である。

Ⅶ層は西壁でⅦa、Ⅶb層に分かれ、いずれも砂層が主体であるが、やや土壌化が進み、粘性をもっている。黒褐色を呈しており、有機物の腐食成分を多く含んだクロスナ層である。Ⅶa層は上層に比べて大きな製塩土器片を含む。本層を除去すると製塩土器が集中する地点が4ヶ所検出され、1号～4号土器溜まりとした(写真24)。1号土器溜まりは調査区北西角に約100cm×100cmの範囲で製塩土器が集中しており、4地点のうち最も製塩土器の出土量が多い。2号土器溜まりは、調査区北東角に30cm×50cmの範囲に見られ、3号土器溜まりは、1号よりレベルが20cm低く、2号土器だまりの南に70cm×70cmの範囲で検出された。4号土器溜まりは、3号土器溜まりとほぼ同じレベルで3号の西に50cm×50cmの範囲で確認された。

第15トレンチの出土遺物は大半が製塩土器であり、とくにⅦ層では焼土、被熱礫、炉壁、炭酸カルシウムも共伴している。

製塩土器(図18・19) 15トレンチでは、1～4号の土器溜まりが検出され、大量の製塩土器が出土した。4ヶ所の中でも広い範囲で検出された1号土器溜まり(図18)と3号土器溜まり(図19)の製塩土器については、1号土器溜まり出土の脚台が底部径が最大で5.65cm、最小で4.4cmを測り、その平均は4.9cmであるのに対し、3号土器溜まり出土の脚台は底部径が最大で5.2cm、最小で3.0cmを測り、その平均は4.25cmである。

15トレンチから出土した製塩土器は6トレンチ出土品に比べると底部径も若干小さく、厚みが薄



写真22 15トレンチ近景（南から）



写真23 調査風景



写真24 製塩土器出土状況（南から）

No. 1～4 土器溜り



表土：にぶい黄褐色（10YR5/4）砂層。粗粒砂層。中粒砂を含み、しまりが弱い。 I：にぶい黄褐色（10YR5/3）中粒砂層。粗粒砂を含む。 II：にぶい黄褐色（10YR6/4）中粒砂層。粗粒砂を含む。 III：黒褐色（10YR3/2）砂質土層。中粒砂を多く含む。しまりが弱い。 IV：暗褐色（10YR3/4）砂質土層。中粒砂を多く含む。しまりが強い。本層以下は製塩土器を含む。 Va：褐色（10YR4/6）粗粒砂層。 Vb：黄褐色（10YR5/6）細粒砂層。 VIa：暗褐色（10YR3/3）細粒砂を主体とする砂層。クロスナ層。しまりが強い。硫酸カルシウム片を含む。 VIb：灰褐色（7.5YR4/2）砂層。 VIIa：黒褐色（10YR2/3）細粒砂層。製塩土器を含む。 VIIb：黒褐色（10YR2/3）細粒砂を含む粘質土層。4基の土器溜りを検出。a層より製塩土器の出土が多い。

図17 15トレンチ北壁土層図

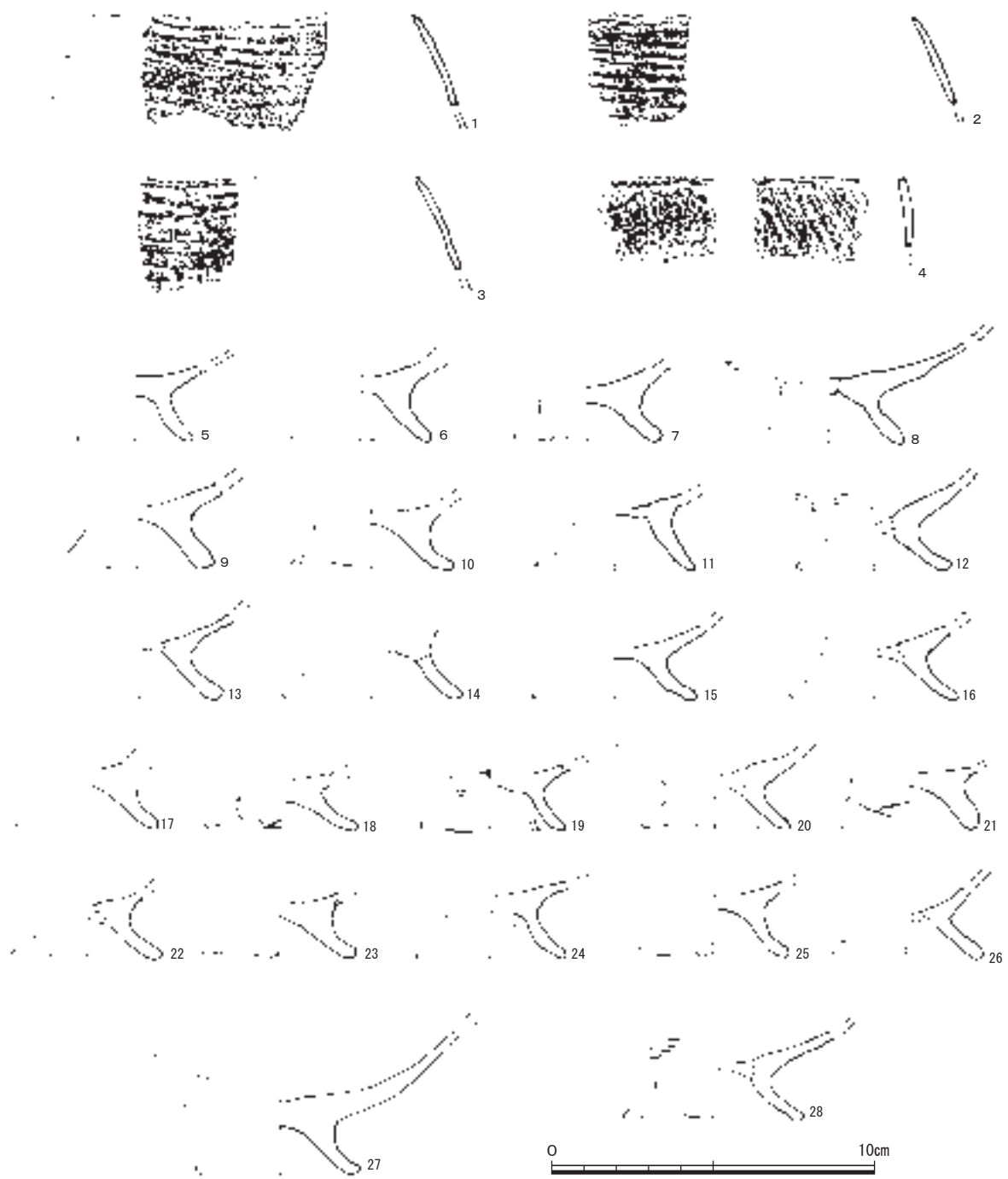


図18 15トレンチ・1号土器だまり出土製塩土器実測図

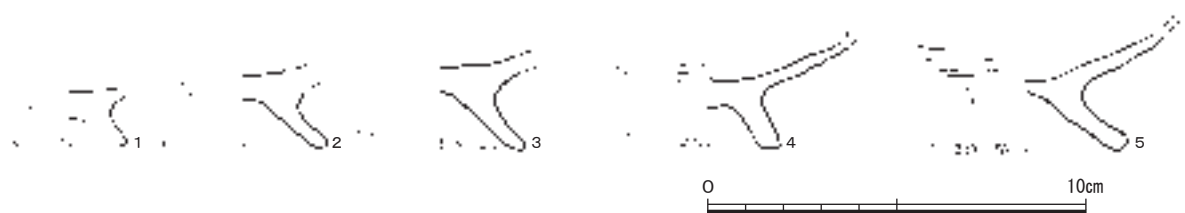


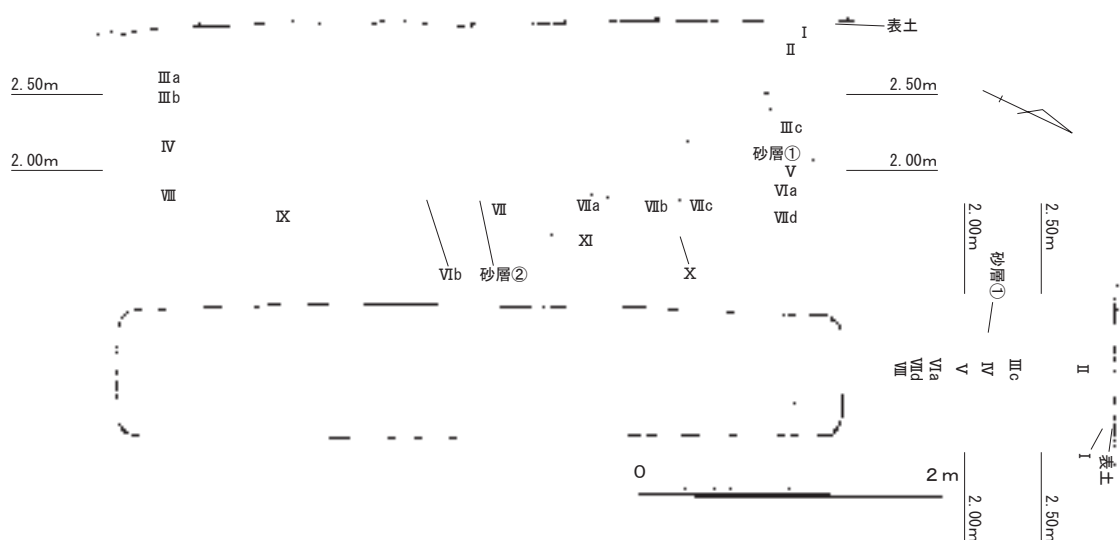
図19 15トレンチ・3号土器だまり出土製塩土器実測図

いということが特徴である。製作技法に注目すると、6トレンチに多く見られた円盤充填法はほとんど見られず、ほとんどが貼り付け技法である。また、15トレンチ出土の製塩土器口縁部は、器壁が薄く、6トレンチに比べるとかなり内傾しており、タタキの痕跡を明瞭に残す例が多い。脚台も6トレンチ出土品に比べると小型で薄い。

(中野真衣)

(9) 18トレンチ

18トレンチは調査区の中心部から離れた北西地域にあり、ポイント17Gと18G間の南北5m、東



表土：黒褐色（10YR3/2）砂質土層。Ⅰ：にぶい黄褐色（10YR4/3）極細粒砂層。大きさにばらつきのある砂粒を含む。しまりが強い。Ⅱ：褐色（10YR4/4）極細粒砂層。大きさにばらつきのある砂粒を含む。しまりが強い。旧耕作土層。Ⅲa：黄褐色（10YR6/4）砂質土層。細礫を少量含む。しまりが強い。中世土師器が出土。整地層。Ⅲb：褐色（10YR4/4）砂質土層。細礫を少量含む。しまりが強い。中世土師器を含む。整地層。Ⅲc：黄褐色（10YR6/6）砂質土層。しまりが弱い。中世土師器を含む。整地層。Ⅳ：褐色（10YR4/4）細礫を少量含むシルト層。しまりが強い。以下、Ⅺ層まで遺物包含層。Ⅴ：黄褐色（10YR5/6）粗粒砂を含むシルト層。製塩土器片を含む。Ⅵa：褐色（7.5YR4/4）大きさにばらつきのある砂粒を含むシルト層。しまりが強い粘性がある。Ⅵb：褐色（7.5YR4/4）砂質土層。大きさにばらつきのある砂粒を少量含む。しまりが強い。Ⅶ：灰黄褐色（10YR4/2）砂質土層。極粗粒砂を含む。しまりが強く粘性がある。Ⅶa：灰色（2.5YR6/1）砂質土層。極粗粒砂と粗粒砂からなる。しまりが強く粘性がある。土器片を含む。Ⅶb：橙色（7.5YR7/6）砂質土層。極粗粒砂と粗粒砂を含む。しまりが強い。Ⅶc：橙色（7.5YR7/3）極粗粒砂と粗粒砂を含む砂質土層。しまりが強い。Ⅶd：褐色（7.5YR3/4）砂質土層。極粗粒砂を少量含むシルト。しまりが強く粘性がある。一部マンガンが沈着。Ⅷ：灰黄褐色（10YR6/2）極粗粒砂層。シルトを含む。しまりが強く粘性がある。古式土師器片を含む。Ⅸ：黄褐色（10YR5/6）粗粒砂層。中粒砂を含む。粘性がある。大量の古式土師器が集中して出土。ほか製塩土器、砥石が出土。Ⅹ：にぶい赤褐色（5YR4/4）粗粒砂層。シルトを含む。しまりが強い。一部マンガンが沈着。Ⅺ：褐色（7.5YR4/4）極粗粒砂層。少量のシルトを含しまりが弱く粘性がある。砂層①：にぶい橙色（7.5YR4/6）中粒砂層。しまりが弱い。砂層②：にぶい橙色（7.5YR7/4）中粒砂層。粗粒砂を含む。しまりが弱い。

図20 18トレンチ平面図・土層図



写真25 18トレンチ作業風景(北から)

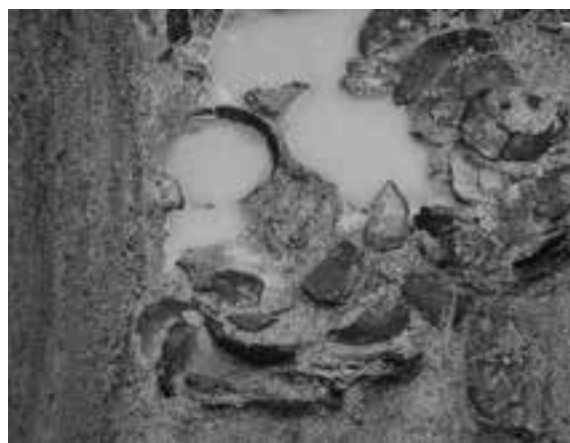


写真26 古式土師器出土状況

西1mのトレンチである。北東には後背湿地が広がり、地表面は南東方向に傾斜する。整地層や包含層のみならず、中世、古墳時代の居住域の存在を確認する目的で調査を行った。

18トレンチの土層は大きくは11層に分かれる。Ⅰ層表土層、Ⅱ層の旧耕作土層は現代の遺物を含んでいる。

Ⅲ層は花崗岩のバイラン土を主体とする砂質土であり、堅く叩きしめられた整地層である。a、b、cに分層できる。Ⅲb層はにぶい黄橙色、Ⅲb層は褐色、Ⅲc層は明黄褐色を呈し、b層、c層はa層に比べしまりが強い。Ⅳ～Ⅵ層もバイラン土を主体とする砂質土であり、色調はやや褐色が強い。Ⅲ層に比べてしまりにかけるが、堅緻な整地層である。Ⅴ層上面はトレンチ北端で北に傾斜しており、そこに砂層①が堆積している。Ⅵ層はa、bの2層に分けられ、褐色を呈し、わずかに粘性をもち、しまりもある。

Ⅶ層はシルトまじりの砂質土層であり、灰褐色を呈する。台形の土手状に堆積し、堅緻なⅦa層の南側に堆積し、その北側のⅦc層はシルトまじりの砂質土層であり、マンガンを含みところどころ褐色を呈している。

Ⅷ層は灰黄褐色を呈し、シルトを含む極粗粒砂層であり、Ⅶ層の砂粒に比較して粒度はやや小さい。その上面はトレンチ南部で大きく傾斜し、また水平な面となっている。Ⅸ層は中粒砂が混じる中粒砂層であり、黄褐色を呈する。この層は褐色を呈する堅緻な砂質土層であるⅪ層により北への広がりがさえぎられている。トレンチ中央部で、Ⅷ層から古式土師器片が少量出土しはじめ、Ⅸ層では南北長約70cmの範囲で古式土師器が集中して出土した。湧水が著しく、本層以下の発掘は断念した。

遺物はⅢ層の各層から中世の土師器片、Ⅴ層では製塩土器片、Ⅵ層は中世の須恵器片、土師器片が出土した。古式土師器が集中して出土したⅨ層ではそのほか製塩土器片、小型砥石も出土した。

(加藤新)

古式土師器 (図21) Ⅸ層で出土した古式土師器には壺、甕、鉢、高坏、小型丸底壺などの器種がある。6トレンチ出土の古式土師器に比べて、全体的に調整が丁寧であり、胎土は精製度が高く、とくに金雲母を多く含む点に特徴がある。

1は中型の壺の破片であり、口径は11cmを測る。口縁部は内湾気味に立ち上がり、鋭く外傾した面をもつ口縁にいたる。調整は内外面ともにほとんどナデ消されており、頸部内面に指オサエが確認できる程度である。胴部内面には当て具とみられる痕跡が数ヶ所認められる。

2、3、4は甕であり、いずれも口縁部から胴部上半にかけての破片である。そのうち2、4は布留系の甕である。2は口縁がやや内湾しながら端部にいたり、口唇部はわずかに立ち上がるものの丸く収められている。口縁部は内外面ともにヨコナデが施されており、胴部外面はタタキが観察できないほど丁寧にナデ消され、内面はヘラケズリのあとナデ消されている。4は口縁がほぼ直線的に開き、その端部はわずかに立ち上がるも端部は丸く収められている。外面は丁寧にヨコナデが施されており、内面はヘラケズリのあとナデ消されている。肩の張りがなく、長胴の甕になると考えられる。



図21 18トレンチ出土古式土師器実測図

高坏は坏部の形態に3種類ある。5は脚の接合部から斜めに立ち上がり、段を介して直線的に開いて口縁部にいたる。小型品である。表面の剥落が著しいが、内外面ともに赤色顔料が塗布されていたと推測され、その下地には細かな縦方向のハケメが観察できる。6は底部からやや屈曲し、斜めに直線的に開き口縁部にいたる。ミガキが丁寧であり、赤色顔料の痕跡が認められる。9は椀形の坏部をもつ。脚部は直線的に広く開いている。坏部の内外面には丁寧なミガキが観察される。7は6の坏部に接合する可能性が高い脚部である。脚部は坏底部との接合部からわずかに径を増しつつ屈曲部にいたり、大きくラッパ状に、直線的に開く。三方向に円形の透孔をもつ。外面は丁寧に磨かれている。8は坏部の立ち上がりが6よりも鋭く立ち上がり、脚部の開きも強い。表面の摩耗が著しいが、胎土はきめ細かく、調整もミガキが施されていたと推測される。

鉢は口縁部が外に屈曲する深めの小型品（10、11）、口縁部からゆるやかに湾曲して底部にいたる浅い小型品（12、15）、口縁部からゆるやかに湾曲する深めの中型品（13）、口縁部から緩やかにS字状に湾曲しながら胴部にいたる中型品（16）がある。10は口縁部が短く直線的に折れており、11は緩やかに外反している。10は外面に丁寧なナデが施されているのに対し、11の外面はタタキが顕著で、下半はタタキがナデ消されている。

14は小型丸底壺である。浅い胴部から屈曲部を介してやや内湾気味に立ち上がって口縁にいたる。胴部は厚く、口縁部は厚い屈曲部から端部にかけて急激に薄くなっている。外面には丁寧な横ナデが認められ、底部付近にはケズリの痕跡がある。

製塩土器（図22、写真27）

製塩土器の脚部が3点出土した。6トレンチから出土した製塩土器に比べ、底部は丸く、横に広がり、脚台はやや直線的に立ち上がるもの（1）と底部が開くもの（2、3）とに分かれるが、いずれの脚台も6トレンチ出土品よりも小型で低い。また色調もやや白っぽく、胎土には金雲母をわずかに含んでいる。



図22 18トレンチ出土製塩土器実測図



写真27 18トレンチ出土製塩土器



写真28 6トレンチ出土製塩土器



写真29 15トレンチ出土製塩土器

第4章 宮ノ浦遺跡に隣接する湿地における ボーリング調査（概報）

はじめに 愛媛県越智郡上島町弓削佐島に位置する宮ノ浦遺跡は、古墳時代から中世にかけて、複数の時期にわたる製塩遺跡である。製塩の過程では塩木と呼ばれる薪を多量に消費することが知られていることから、佐島あるいは弓削荘域における製塩の発展が当地域の森林にあたえた影響を明らかにすることを目指し、2013年8月19日ならびに2014年8月18日・19日に、宮ノ浦遺跡に近接する湿地で堆積物試料の採取を試みた。

方 法 試料採取地点を図23に示す。採取地点は、昭和まで耕作が行われていた放棄水田の一角であり、宮ノ浦遺跡の位置する砂嘴の後背湿地であると考えられる。

2013年度の調査（2013地点）では、深度55cmまでスコップで掘り下げ、断面からブロック状に堆積物を切り出した。また55cm以深についてはヒラー型ボーラーを改良したトーマス型採泥器を用いてハンドボーリングを実施し、深度185cmまでの試料を採取した。

2014年度の調査では、2地点で掘削をおこなった。2014-1地点では深度1mまで、2014-2地点では深度50cmまでスコップで掘り下げ、断面からブロック状に堆積物を採取した。ただし、2014年度は調査の前に降雨が続き、湿地が滞水してぬかるみ状になっていたため、掘削の際に表層近くが攪乱された可能性がある。

これらの試料は、プラスチックフィルムおよびアルミホイルに包み、研究室に持ち帰った。

結 果 2013地点の堆積物は、深度7cmまでは農業用資材等を含む現在の耕作土、深度7～55cmは粘土（うち20～23cmに砂層を挟む）、深度55～185cmは砂質の堆積物であった。また深度55～65cm、深度160～166cmは粗い砂が堆積しており、ボーラーでの採取ができなかった。

2014-1地点の堆積物は、深度40cmまでは根茎など植物遺体を多く含む粘土、深度40～70cmは砂を含む粘土、70～100cmは粗い砂の層であった。

2014-2地点では、深度0～13cmまでは根茎など植物遺体を多く含む粘土、深度13～50cmは砂混じりの粘土（うち深度25～30cmに砂の層を挟む）、深度50cm以深は固く締まった粗い砂の層であった。

今後の課題 当地域における製塩の発展が周辺の森林に与えた影響を明らかにするため、これらの堆積物試料について、放射性炭素年代測定および花粉分析を進めている。

2013年度に採取した試料については、粘土質の層で花粉化石が検出されている。2014年度に採取した試料についても、花粉の抽出を進めており、十分な花粉が検出されれば、2013年度の堆積物と合わせて、過去の周辺植生の復元に資する資料となると期待される。

謝 辞 2013年度調査では、付永敢氏（中国・山東大学）、2014年度調査では、鄭宗銅氏、金

英傑氏ならびに金東柱氏（韓国・東洋大学）にご助力いただいた。彼らの力なくして、湿地の掘削はできなかった。ここに記して心より感謝申し上げる。

（佐々木尚子）

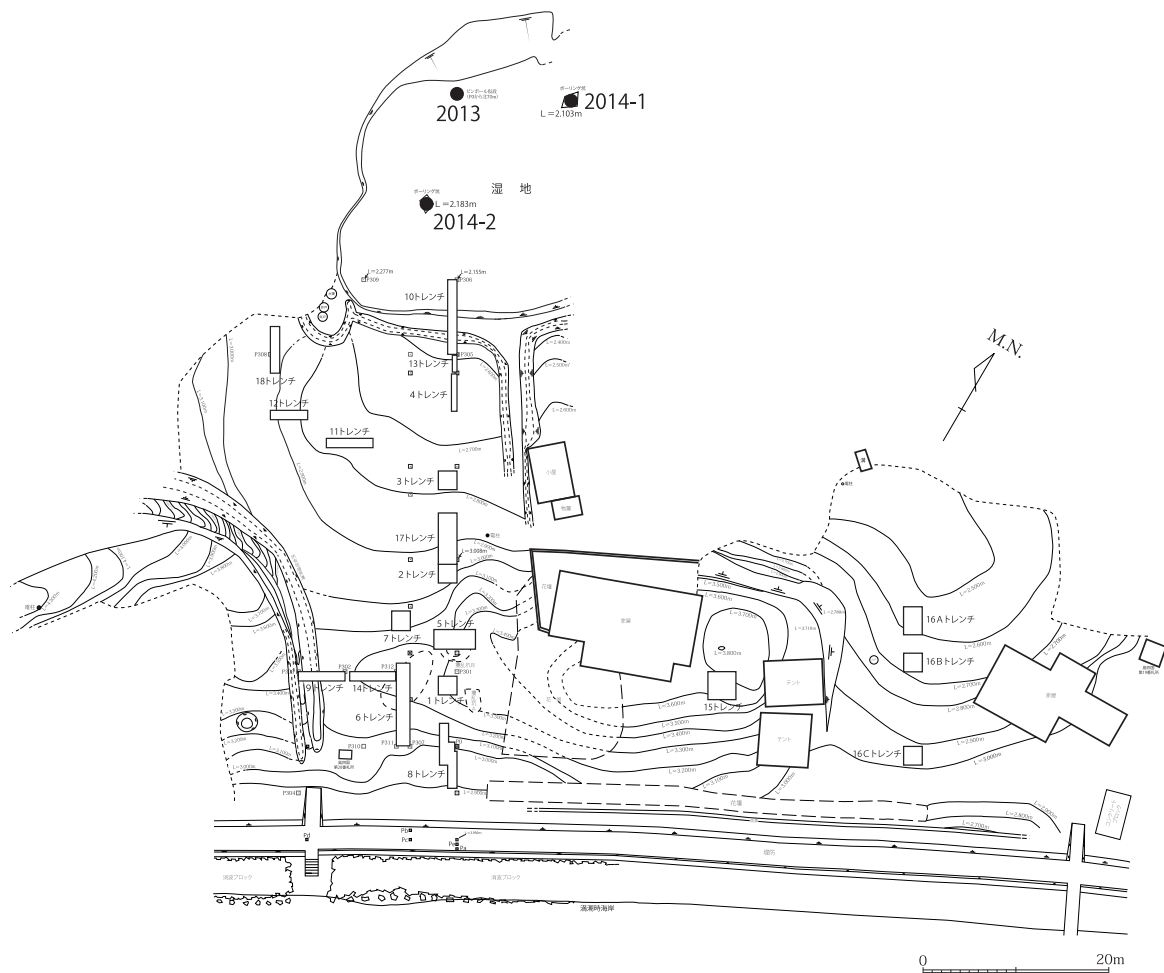


図23 試料採取地点の位置



写真30 後背湿地におけるボーリング調査風景（左：第3次調査 右：第4次調査）

第5章 課 題

1. 古式土師器について

宮ノ浦遺跡の第4次調査では18トレンチにおいて一括遺物として評価しうる古式土師器が出土し、6トレンチでも多数の脚台式製塩土器片に混じって古式土師器片が出土した。第3章の出土遺物の概要を受けて、6トレンチと18トレンチ出土の古式土師器を比較検討してみたい（図24）。

両トレンチで共通する器種が限られているため組成上の議論はできないが、総じて18トレンチ出土土器が白っぽく発色し、器面の調整が丁寧である。18トレンチから出土した甕にみられるタタキ後のナデ消しや高坏、鉢のミガキは、6トレンチ出土甕が器表にタタキを顕著に残し、鉢がハケメをみせる点と対照的である。胎土も18トレンチ出土土器の方が精良で、とくに金雲母を含む点は6トレンチ出土土器と大きく異なっている。

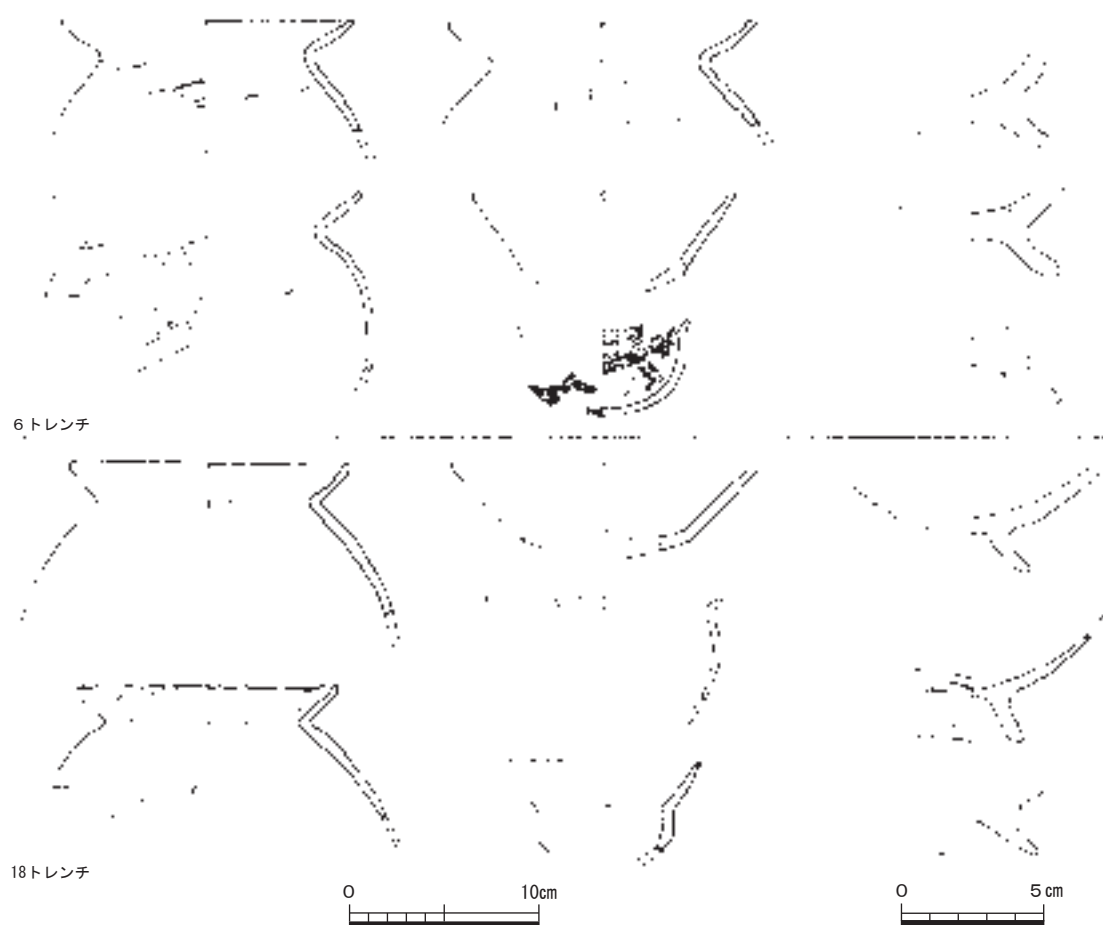


図24 6トレンチ（上段）・18トレンチ（下段）出土土器の比較

両トレンチで出土している甕については、調整のみならず、口縁端部の形状、口縁の傾き・反りにも差があり、胴の張りなどの点も含めて18トレンチ出土甕が後出的な属性を多くもっている。

両トレンチの差は古式土師器のみならず、共伴した脚台式製塩土器にも顕著である。6トレンチ出土の脚台は大きく、厚く、底部の製作技法が複雑で多様である。18トレンチ出土品にはそのような様相はない。また色調も6トレンチが茶褐色、赤褐色であるのに対し、18トレンチは黄褐色を呈する。とくに18トレンチ出土製塩土器にはわずかながら金雲母が含まれ、古式土師器と特徴を共有する。脚台の大きさを基準とする製塩土器の編年からすれば6トレンチ出土品が古く、古式土師器の新古関係を裏付けることとなろう。

現段階では、製塩土器が出土している15トレンチでは良好な古式土師器の出土がない。このトレンチの製塩土器も6、18トレンチのいずれとも異なっているので、異なる特徴をもつ古式土師器が出土する可能性も高い。広島県の備後と愛媛県の東予を両端とする芸予諸島の古式土師器には編年、系譜などいまだ解決されない点が多いので、宮ノ浦遺跡出土資料の検討を通じて明らかにしていきたい。

(村上恭通・八木宏明)

2. 脚台式製塩土器の口縁部について

脚台式製塩土器は脚台部の大きさや底径が編年の基準となることが多く、口縁部片や体部片が検討の対象となることは少ない。宮ノ浦遺跡では、報告文にもあるように異なった特徴をもつ脚台片が地点を違えて出土しており、それぞれの地点で口縁部片を伴っている。

製塩土器が一定量出土した6トレンチと15トレンチの資料について比較を試みたい(図25上段)。それぞれ10点ずつ、口唇部と口唇部から1cm下の2箇所器壁の厚みを計測し、平均値の比較を試みた。6トレンチ出土の製塩土器は口唇部平均値が2.84mm、口唇部から1cm下の平均値が2.95mmである。また口縁の内傾度は平均10.7°を測る。調整はタタキがほとんど確認できないものも多く、大半はナデ消されている。一方、15トレンチ出土の製塩土器は口唇部平均値が2.17mm、口唇部から1cm下の平均値が2.38mmであり、内傾度は平均21.6°を測る。調整はタタキが明瞭に残っているものが多い。以上のことより、6トレンチ出土の製塩土器は器壁が厚く、内傾が弱い点の特徴であり、15トレンチ出土の製塩土器は、器壁が薄く、6トレンチに比べるとかなり内傾していることが特徴といえる。

本遺跡の製塩土器と広島県松永湾沿岸地域、愛媛県芸予諸島南部地域の例と簡単な比較を試みた。満越遺跡(広島県尾道市浦崎町満越)〔森重編1984〕の製塩土器(同図下段・右)を10点測定すると、口唇部平均値2.55mm、口唇部から1cm下の平均値2.60mmであった。一方、多々羅製塩遺跡(愛媛県越智郡上浦町甘崎)〔柴田・相原編1994〕は口唇部平均値3.55mm、口唇部から1cm下の平均値3.35mmであった(同図下段・左)。これらの結果から、厚みの点では6トレンチ出土の製塩土器は多々羅製塩遺跡出土の製塩土器と類似し、15トレンチ出土製塩土器は満越遺跡出土の製塩土器

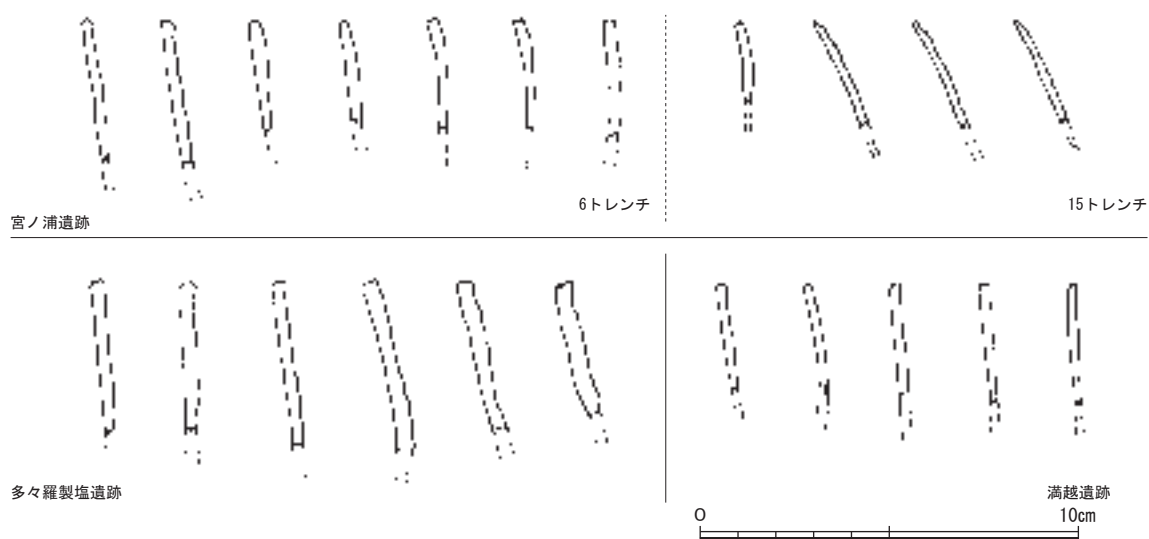


図25 製塩土器口縁部の比較

と近似している。

宮ノ浦遺跡では6トレンチと15トレンチでは、製塩土器の脚台部の違いに対応した口縁部の2つの様相があると解釈できる。ただし内傾度に関する違いは比較した2つの遺跡に共通点を見出すことが現段階ではできない。今後も他の遺跡出土例を含めて検討を続けたい。

(中野真衣)

3. 吉備系土師器について

宮ノ浦遺跡では上層より古代末から中世にかけての土器、陶磁器片が多数出土している。貿易陶磁器の出土は当遺跡を中世の流通社会の中に位置づけて議論することができる。しかしその性格上、遺構や整地層の年代を決定するうえでは十分な資料といえず、在地あるいはその近隣で生産された土器が重要な指標となる。当遺跡からは明らかにそれとわかる吉備系土師器が出土しており、ここでは碗の高台片を集成して検討したい。なお編年および年代観については草戸千軒町遺跡における土師質土器の編年研究〔鈴木1996〕を参考にした。

出土した吉備系土師器は総じて灰白色～浅黄橙色を呈し、焼成は堅緻なものが多い(図26)。1は16AトレンチⅢ層側溝より出土し、復元底径5.8cm、高台高0.8cmを測る。比較的大振りで、高台は器体を安定させる機能をもつ。胎土は0.1～1mm程度の金雲母をまばらに、1～2mm程度の白色粒を少量含む。残存状態が悪く、ミガキは確認できないが草戸前Ⅰ期以降のものと考えられる。2は9トレンチⅢ層中より出土し、復元底径5.2cm、高台高0.7cmを測る。高台外面に指頭圧痕が残り、内面は粘土がはみ出している。胎土は0.5～1mm程度の白色粒を少量、0.1～0.5mm程度の金雲母をまばらに含む。草戸Ⅰ期前半～後半段階のものと思われる。3は12トレンチⅣ層より出土し、復元底径5.0cm、高台高0.6cmを測る。高台は器体を安定させる機能を保ち、胎土は0.1～0.3mm程度の

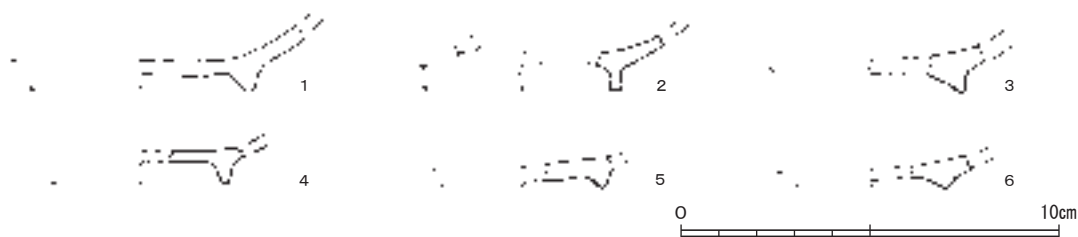


図26 宮ノ浦遺跡出土の吉備系土師器

金雲母をまばらに含む。省略した高台をもつⅢ期の和泉型瓦器碗と共伴することからも草戸Ⅰ期前半のものと比定できる。4は3トレンチ西半Ⅲ層より出土し、復元底径4.8cm、高台高0.6cmを測る。つくりは比較的丁寧であるが高台高は低くなり、全体の法量は小振りであると思われる。胎土は0.1mm程度の金雲母をわずかに含む。草戸Ⅰ期後半段階のものと比定できる。5は18トレンチⅦ層上層より出土し、復元底径4.4cm、高台高0.5cmを測る。高台は断面三角形状を呈し、器体を安定させる機能は失われつつある。胎土は0.1～0.5mm程度の白色粒を全体的に含む。草戸Ⅰ期後半～Ⅱ期前半段階のものと比定される。6は17トレンチⅡ層より出土し、復元底径4.0cm、高台高0.3cmを測る。低く、断面三角形状の高台をもち、器体を安定させる機能は失われている。簡略化が進み、粘土紐貼り付けの痕跡を明瞭に残す。0.1mm程度の金雲母をまばらに含む。草戸Ⅱ期前半～Ⅱ期後半段階のものと比定できよう。

以上のように宮ノ浦遺跡出土の吉備系土師器は、広島県福山市の草戸千軒町遺跡の編年で前Ⅰ期～Ⅱ期後半段階の変化を見いだすことができ、実年代では12世紀後半～14世紀中頃に相当することが明らかとなった。高台の変化の一方で、精良な胎土には必ず金雲母が含まれている。今後、芸予諸島における吉備系土師器の流通を考えるうえで注目すべき要素と考えられる。

(織田誠司)

4. 製塩遺跡とクロスナ層の関連について

臨海部、とりわけ砂丘を生産の場とする製塩活動は、砂丘が使用できるという前提があつてこそ初めて可能であつた。その砂丘について、その形成過程が寒冷化という気候変動に起因するものであり、その一方、温暖期には海からの砂の供給が停止し、砂丘表面に植物が繁茂し、腐食層、すなわちクロスナ層が形成されるという過程が甲元真之氏の一連の研究によって注目されるようになった〔甲元2005〕。環境変動は一般的には広域に起こるものであること、そしてクロスナ層が形成された温暖期には安定した砂堆上で人間が活動し、遺物を残していること、この二つの点が考古資料の広域比較を可能とする点でもこのクロスナ層論は注目に値する。

宮ノ浦遺跡では第3次調査以降、砂丘を発掘する際の基本姿勢としてクロスナ層の存在を意識し、古墳時代前期の脚台式製塩土器がクロスナ層に確実に伴う点を明らかにした。脚台式製塩土器

の段階に芸予諸島で爆発的に製塩遺跡が増加するという現象についてはすでに柴田昌兎氏によって指摘されているが〔柴田2007〕、その背景はまさに温暖化という環境変動が促進したものといえよう。瀬戸内海の東に目を転じて、兵庫県淡路島の製塩土器をみると、淡路市引野遺跡では脚台が小型化し、消滅して丸底にいたるまでの製塩土器がクロスナ層に確実に伴っている〔伊藤編1999〕。なお同市内で発掘された貴船神社遺跡でも製塩用石敷炉はクロスナ層に伴っている〔伊藤編2002〕。またかつて発掘調査を行った福岡市海の中道遺跡でも古代の製塩痕跡はクロスナ層と密接に関係していた〔山崎編1993〕。クロスナ層と製塩活動の関係に関して地域と時代を超えた検討が今後の課題となる。

また報告にもあるように宮ノ浦遺跡では地点によって製塩土器の脚台の大きさが異なる点を明らかにしている。脚台式製塩土器の時代でも、地点を変えて製塩活動を行わざるをえない環境に向かいつつあったのかも知れない。芸予諸島では脚台を失ったコップ形製塩土器段階、すなわち古墳時代中期の製塩遺跡には確実な例はない。寒冷期といわれる5世紀は当然砂丘形成期であり、前期のような製塩の活況は期待できない。宮ノ浦遺跡における製塩地点の移動も古墳時代中期に向けて製塩活動が衰退する途上にある可能性も想定できよう。

(村上恭通)

5. 中世の塩田址について

2トレンチで確認した整地層の最下層Ⅲc層は第1次調査の時点で塩田の基盤層であると判断した。このⅢc層は第1次調査の際に行った漏水実験で、その上面でできた水たまりがなかなか消えず、保水性があることを確認した。また長雨が続いた第4次調査では、2・17トレンチの約8mにわたる東壁面において、Ⅲc層の上層のみが乾燥しないという状況をいくども観察できた。廣山堯道氏による中世塩田の分類によれば、汲塩浜法や塗浜法（置き浜法）では浜床の基盤に粘土を貼り、撒いた海水が下層に一気に漏れることを防ぐといわれている〔廣山1983〕。その構造と機能を2トレンチの発掘成果は証明しているといえる。

さらに第4次調査では2トレンチと17トレンチを隔てたベルト直下ではほぼ東西に走る掘り形のラインを検出した。砂層を掘り込んで保水性の高いⅢc層を底に貼り付け、その上にⅢb層、Ⅲc層を突き固めて浜床としたことが判明した。

その時期は出土した吉備系土師器などの年代から概ね12世紀から遅くとも14世紀の間に収まるに当たる。中世であるので揚浜式塩田であることは廣山氏の研究成果も示すところであるが、大潮時の満潮ラインよりⅢa層の上面レベルが高いこともまた入浜式塩田である可能性を排除するものである。今後はこのⅢc層の範囲、すなわち塩田の範囲確定を宮ノ浦遺跡発掘調査の課題の一つとしたい。

(村上恭通)

【参考文献】

- 石井千絵里編2008 『豊島明神遺跡・入津遺跡試掘調査報告書』愛媛大学法文学部考古学研究室
- 伊藤 宏幸編1999 『引野遺跡発掘調査概要』東浦町教育委員会
- 伊藤 宏幸編2002 『貴船神社遺跡（製塩遺跡）』北淡町教育委員会
- 幸泉 満夫 2012 「上島町佐島・宮ノ浦遺跡の第1次発掘調査成果」『芸予諸島・上島島域における製塩の歴史～佐島・宮ノ浦遺跡の発掘成果とその意義～』愛媛大学考古学研究室第12回公開シンポジウム予稿集、愛媛大学考古学研究室
- 甲元 真之 2005 「砂丘の形成と考古学資料」『文学部論叢』86（歴史学編）、熊本大学文学部
- 柴田 昌児 2007 「西部瀬戸内と芸予諸島周辺域における海人集団の動態」『古墳時代の海人集団を再検討する―「海の生産用具」から20年―』第56回埋蔵文化財研究会要旨集、埋蔵文化財研究会
- 柴田昌児・相原清志編1994 『多々羅製塩遺跡』媛埋5－9、財団法人愛媛県埋蔵文化財センター
- 鈴木 康之 1996 「土師質土器の編年」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅴ』広島県教育委員会
- 田中 謙編 2014 『芸予諸島・海民文化の考古学』今治市村上水軍博物館・愛媛大学法文学部考古学研究室
- 田中 良之 2014 「人骨から見えてくる原始古代」『弥生・古墳時代における芸予諸島：環境と人間』愛媛大学考古学研究室第14回公開シンポジウム予稿集、愛媛大学法文学部考古学研究室
- 長井 数秋 2008 「弓削諸島の考古学」『ソーシャル・リサーチ』33、ソーシャル・リサーチ研究会
- 古瀬 清秀編2002 『瀬戸内に関する研究』財団法人福武学術文化振興財団
- 廣山 堯道 1983 『日本製塩技術史の研究』雄山閣
- 村上 恭通編2005 『瀬戸内海西部閉鎖海域における海民文化形成史の考古学的研究Ⅰ』平成16（2004）年度愛媛大学研究開発支援研究（萌芽的研究）研究成果報告書、愛媛大学法文学部考古学研究室
- 森重 彰文編1984 『満越遺跡－製塩遺跡発掘調査概要－』尾道市教育委員会
- 山崎 純男編1993 『福岡市海の中道遺跡Ⅱ』朝日新聞社西部本社・海の中道遺跡発掘調査実行委員会

愛媛県越智郡上島町

宮ノ浦遺跡Ⅰ

— 第1次～第4次発掘調査概報 —

(上島町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告第1集)

2015年3月31日発行

編集 愛媛大学法文学部考古学研究室
〒790-8577 愛媛県松山市文京町3

発行 愛媛県越智郡上島町教育委員会
〒794-2520 愛媛県越智郡上島町弓削佐島583番地

印刷 岡田印刷
〒790-0012 愛媛県松山市湊町7-1-8
